第Ⅲ編　円蔵 下ヶ町遺跡第24次調査

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

茅ヶ崎市円蔵2463番5における土木工事等について、令和４(2022)年２月16日に代理人から埋蔵文化財包蔵地の照会を受けた茅ヶ崎市教育委員会教育推進部社会教育課(以下「社会教育課」という。)は、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地の下ヶ町遺跡(神奈川県・茅ヶ崎市埋蔵文化財包蔵地台帳№184遺跡)の包蔵地内であることから文化財保護法(以下「法」という。)第93条第１項に基づく届出を求めた。

これを受けて事業主(個人)から令和４年２月18日付けで「法第93条第１項に基づく届出」が提出された。周辺の状況から現在の土木工事計画が遺跡に影響を与えると判断し、事業主(個人)に対し遺跡の現状保存のための設計変更等の検討を依頼した。その後、検討結果を踏まえ事業主(個人)と協議を行い、個人住宅の一部については記録保存のための事前発掘調査を実施することで調整を行った。調査面積は、事業面積100.13㎡に対し20.00㎡であり、残りの部分については原則現状保存とした。調査は、茅ヶ崎市教育委員会が実施することで協議をまとめ令和４年３月17日から実施することとした。

表37　発掘調査に係わる文書一覧表

	文書種別・内容	文書番号	日　付	発信者	受信者	備考
1	**埋蔵文化財所在有無の照会**					
	所在有無の照会	－	令和４年２月16日	代理人	市教委	
2	**文化財保護法 第93条第１項に基づく土木工事の届出**					
	土木工事の届出	－	令和４年２月18日	事業主	県教育長	市教委経由
	発掘指示の通知	文遺第 61095号	令和４年３月９日	県教育長	事業主	市教委経由
3	**出土品の手続き**					
	埋蔵物の発見届	－	令和４年４月１日	市教委	市警察署長	
	埋蔵文化財保管証の提出	－	令和４年４月１日	市教委	県教育長	
	文化財認定と帰属の通知	文遺第 51002号	令和４年４月19日	県教育長	市教委	

＊名称の略記　・県教育長：神奈川県教育委員会教育長　・市教育長：茅ヶ崎市教育委員会教育長　・市教委：茅ヶ崎市教育委員会
・市警察署長：茅ヶ崎警察署長

第２節　調査区の設定と調査の方法

第１項　調査区の設定

調査は事業地南東部の建物予定範囲を対象に実施した。調査区は隣地宅地との安全を考慮し、北側土地境界から0.50ｍ、東側土地境界から0.60ｍ分を後退し、事業予定地内の北東部に2.50ｍ×8.00ｍの調査区を設定して実施した。最終的な調査面積は20.00㎡となった。調査にあたっては、調査範囲全体に対して2.00ｍグリッドを設定し、グリッドの方眼は国家座標に一致させた。グリッドは北西隅を基準として南方向に向かってＡ、Ｂ、Ｃ…、北辺が東方向に向かって１、２、３…となるよう設定し呼称した。

測量点は、調査区の南側に所在する茅ヶ崎市４級基準点№A94(X=-72698.353ｍ、Y=-39646.022ｍ、H=5.816ｍ)を移設し、事業地内に１箇所(X=-72675.257ｍ、Y=-39632.435ｍ、H=5.846ｍ)設定した。

第67図　調査区位置図(1/250)

第２項　調査の方法

土層の掘り下げは、客土と宝永火山灰を含む第Ⅰ層を重機、近世～古代の包含層と考えられる第Ⅱ・Ⅲ層、地山層との漸位層である第Ⅳ層を重機と人力を併用して掘削し、それ以下については人力で掘削した。遺構確認は第Ⅱ～Ⅴ層上面で行い、残土は事業地内に仮置きした。遺構調査終了時には、高所作業車を使用して全景写真を撮影した。

出土遺物は客土～第Ⅰ層掘削時においては一括、それ以下については基本的に遺構毎に一括で取り上げた。また、概ね5.0cm以上の遺物や特殊な遺物等は必要に応じて点上げ、まとまって出土した遺物については微細図を作成した。

遺構の平面図はトータルステーションを用いて縮尺1/20、微細図は遣り方測量で1/10で作成し、断面図は縮尺1/20ですべての遺構および調査区壁断面について作成した。その他の記録については必要に応じて適宜作成した。

第３節　調査の体制と経過

第１項　調査の体制

現地調査および整理作業、報告書刊行作業は以下の体制、期間で行った。（五十音順、敬称略）。

調査体制

①調査地点　神奈川県茅ヶ崎市円蔵字下ヶ町2463番5

②調査目的　個人住宅新築工事に伴う記録保存のための発掘調査

③調査期間　現地調査：令和４(2022)年３月17日から同年３月29日

整理・報告書作成：令和４年４月１日から令和７(2025)年３月31日

④調査体制

現地調査：担当　三戸智也　　調査員　大久保日向子　髙橋桃子　田中万智

調査補助員　大竹惠子　内田惠子　髙橋浩子

調査支援　亀井進　白井広明　武井博　宮下秀之(株式会社カナコー)

⑤資料整理：担当　三戸

整理作業員　及川利加子　大屋信子　澤村奈穂子　清水三恵　髙橋桃子　山下恒子

遺構図面修正・トレース：髙橋

⑥報告書作成：担当　三戸

作業員　伊藤俊一　大屋　澤村　髙橋美智子　田中

挿図作成：伊藤　田中　三戸

遺物実測図・拓影図作成・トレース：大屋　髙橋　　観察表作成：伊藤

遺構写真：三戸　　遺物写真：澤村　田中

写真図版作成：伊藤　三戸

⑦助言・協力者　　大村浩司　加藤大二郎　株式会社カナコー

第２項　調査の経過

近隣への事前説明を行った後、令和４年３月17日から現地調査を開始した。

３月17日は、準備工として調査地点の安全管理対策および機材の搬入を行い、同時に仮原点への座標値移動を行った。その後事業設計図をもとに調査区を設定し、光学測量により調査区周辺図を作成した。

重機による表土掘削を行った後、人力により掘り下げて遺構確認を行った結果、近世の第１号溝や第２号・４号溝他を検出し、各溝の掘削を開始した。

３月22日は第２号溝を完掘し、各図面の作成および写真撮影を完了した。また第４溝の掘り下げ過程で第１号集石を検出した。

３月23日は第１a号溝を完掘して平面図や写真撮影をした後、第１b号溝の掘削を開始した。また第１号竪穴址の掘削を開始した。なお第１b号溝掘削時は安全を考慮し、調査区北西壁の流土防止工事を行った。

３月24日は第１号集石の掘削・精査、微細図を作成した。その後第１b号溝・第１号集石や第４号土坑を完掘し、各図面の作成および写真撮影を完了した。第４号溝の掘り下げ過程で第１号土壙墓を検出した。

３月25日は第１号土壙墓の精査、微細図作成および骨の取り上げを行い、随時写真撮影をした。

３月28日は第１号土壙墓を完掘して平面図や写真撮影をした後、第２号・３号土坑、第４号溝や第１号竪穴址を完掘し、各図面の作成および写真撮影を完了した。

各遺構の完掘後、調査地点の航空写真撮影などの全体写真撮影を行った。

３月29日は埋め戻した後、調査地点の現況回復作業や機材の撤収作業を行い、現地調査を終了した。

発掘調査中は、社会教育課の大村浩司氏、加藤大二郎氏の多大なる協力を得た。

第３項　整理作業

出土品整理は令和４年４月１日から令和７年３月31日まで茅ヶ崎市文化財調査事務所で三戸智也が中心となり適宜実施し、報告書を刊行した。なお、現地で付した遺構名・番号については遺物注記および本書作成にあたり表38の通り変更した。

表38　遺構名称変更一覧表

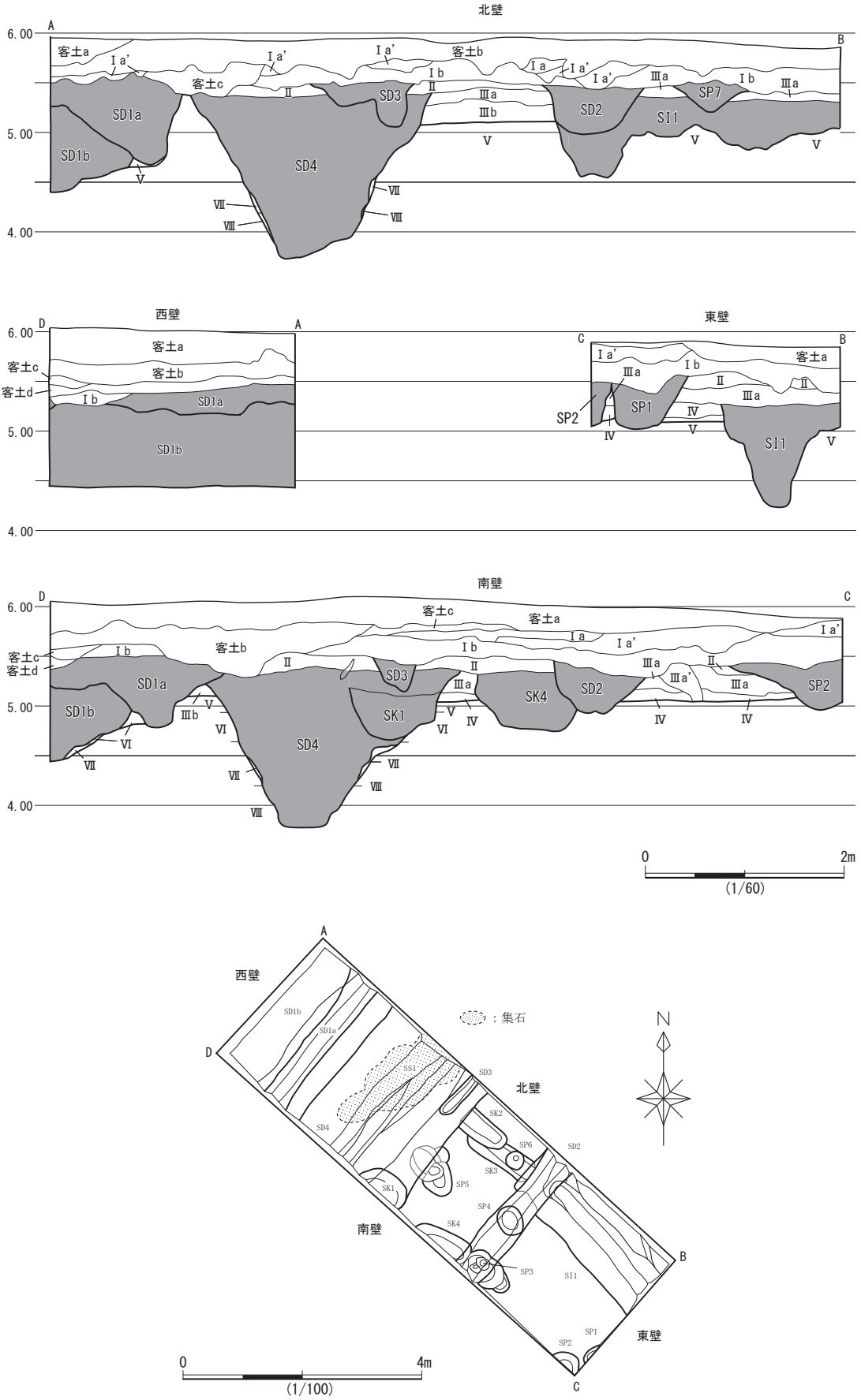
本書掲載遺構名称		原図記載遺構名称
第４号溝	←	３号溝
第４号土坑	←	４号溝
第３号土坑	←	５号溝
第３号溝	←	６号溝
第２号土坑	←	７号溝
第１号土壙墓	←	１号土坑
第１号竪穴址	←	１号竪穴状遺構
遺構名称は原則として現地調査時の番号を使用し、変更が必要になったものは本表にまとめた。		

第４節　基本土層

基本土層は、調査区壁の土層を図示した。

土層は地表から順に、既存建物の解体土と考えられる客土a、宅地造成時の盛土・整地層と考えられる客土b・cがあり、第Ⅰ層が宝永パミスを含む近世後半以降の堆積土、第Ⅱ層が近世から中世の堆積土、第Ⅲ層が古代から古墳時代の堆積土、第Ⅳ層が古墳時代以前の堆積土、第Ⅴ層以下が無遺物の地山層と考えられる。以下、各層の特徴について記述する。

客土a：暗褐色土（10YR3/3）	しまり極めて強い。粘性ややあり。
客土b：暗褐色土（10YR3/3）	しまり強い。粘性あり。ロームブロックを含む。礫を含む。
客土c：黄褐色土（10YR4/6）	しまりあり。粘性あり。
客土d：黒褐色土（10YR2/1）	しまりあり。粘性あり。
第Ⅰa層　：暗緑灰色土（5G4/1）	しまり強い。粘性少ない。宝永パミス径5.0㎜を含む。
第Ⅰa'層：緑灰色土（5G6/1）	しまり強い。粘性少ない。宝永パミス径5.0㎜を含む。
第Ⅰb層　：灰黄褐色土（10YR4/2）	しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径5.0㎜を含む。
第Ⅱ層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）	しまりやや強い。粘性ややあり。橙色スコリア、白色パミス径2.0㎜を少量含む。
第Ⅲa層　：暗褐色土（10YR3/3）	しまりやや強い。粘性あり。橙色スコリア径2.0㎜を含む。
第Ⅲa'層：暗褐色土（10YR3/3）	第Ⅲa層に似るが黒味強い。根の影響か。
第Ⅲb層　：暗褐色土（10YR3/4）	しまりやや強い。粘性あり。橙色スコリア径2.0㎜を多く含む。
第Ⅳ層：褐色土（10YR4/4）	しまりやや強い。粘性あり。第Ⅲ層と第Ⅴ層の漸移層。
第Ⅴ層：黄褐色土（10YR5/6）	しまり強い。粘性ややあり。白色粒子を含む。
第Ⅵ層：褐色土（10YR4/4）	しまり強い。粘性あり。橙色スコリア径2.0㎜を含む。
第Ⅶ層：明黄褐色土（10YR6/6）	しまりあり。粘性強い。橙色スコリア径2.0㎜を含む。
第Ⅷ層：明黄褐色土（10YR7/6）	しまりあり。粘性強い。鉄分を多く含む。第Ⅶ層より粘土質。

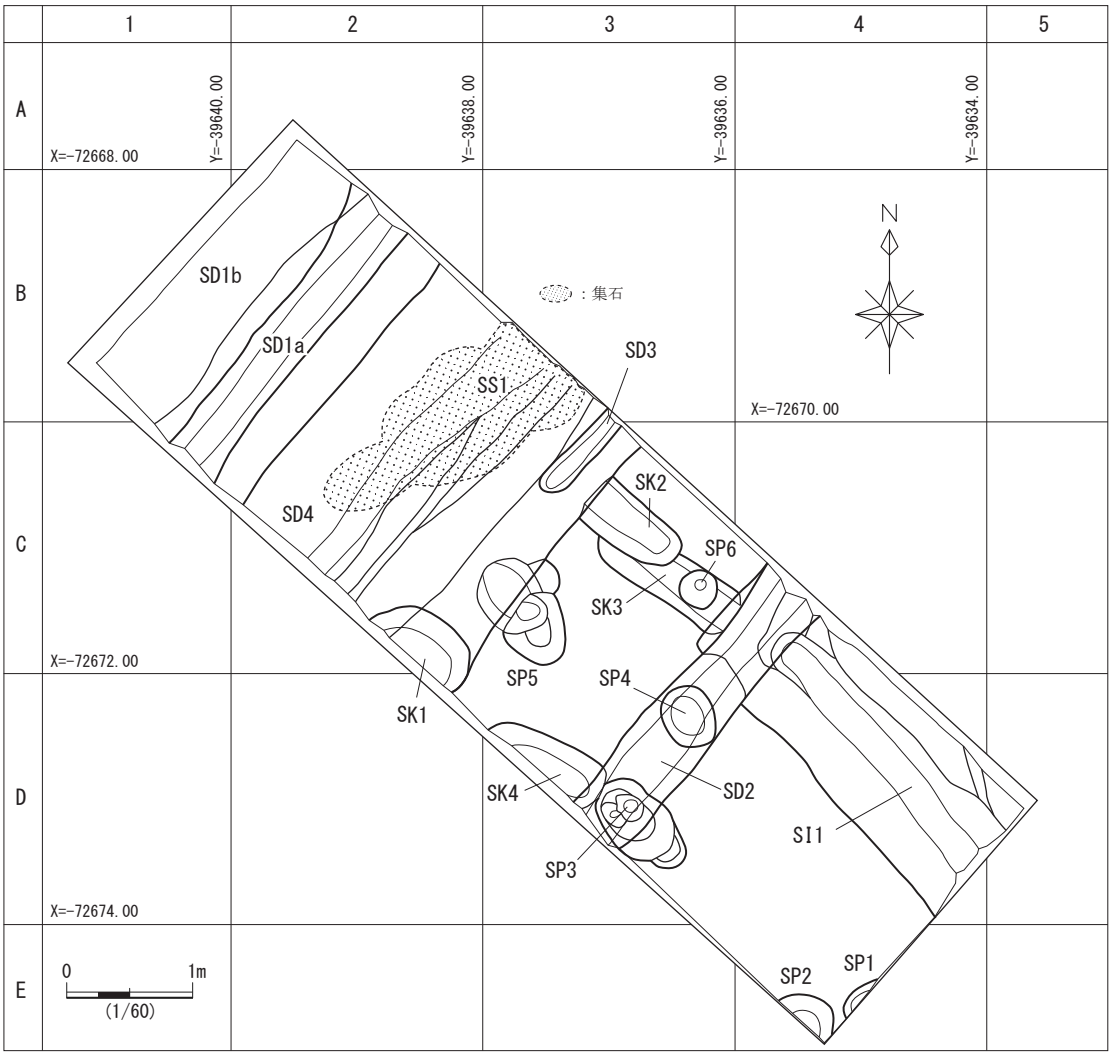


第68図　基本土層図(1/60・1/100)

第Ⅱ章　発見された遺構と遺物

本調査では、古代から近世の遺構や遺物が発見された。遺構は古代～中世のピット３穴、中世の竪穴址１基、中世～近世の溝１条、土坑３基、ピット１穴、近世の溝３条、集石１基、土壙墓１基、ピット３穴を検出した。このほか調査区北壁断面に近世のピット１穴(第68図SP7)を確認した。中近世の遺構密度に比して、古代～中世の遺構は散見される程度であることが窺われる。

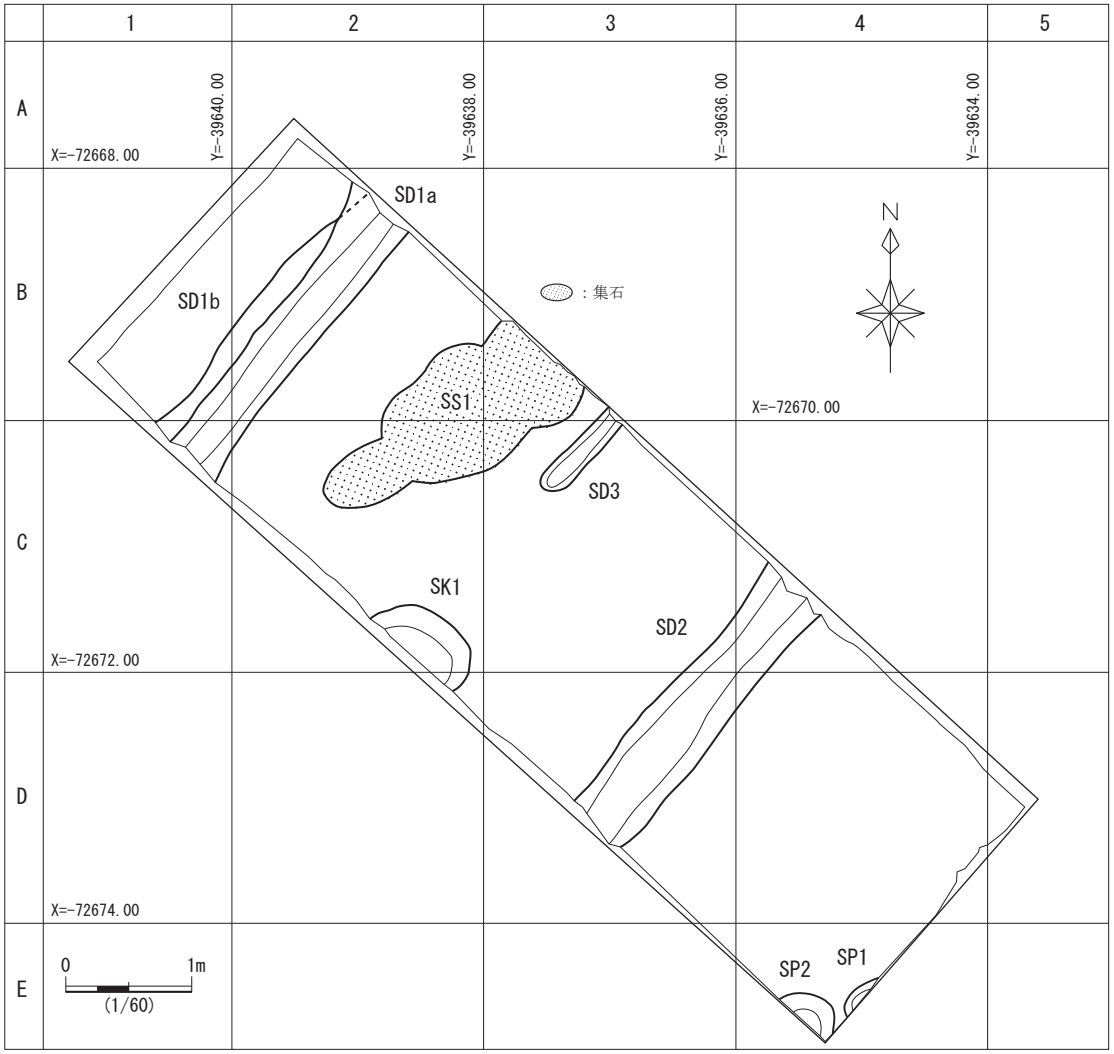
出土遺物は整理箱２箱分が出土した。総量は土師器162片397.4ｇ、須恵器24片733.7g、灰釉陶器１片2.7ｇ、かわらけ５片58.5ｇ、陶器16片881.5ｇ、青磁１片1.3g、磁器５片41.2ｇ、鉄製品２点114.3ｇ、石製品２点110.6ｇ、礫123点18,735.8g、人骨５点139.9g、獣骨21点16.1gなどである。量としては、集石から出土した礫以外では土師器片が最も多いが、いずれも細片であった。また青磁片や12～13世紀代の陶器が少量出土し、中世における人的活動の痕跡を窺い知る資料となった。



第69図　遺構配置図(1/60)

第１節　近世

第Ⅱ～Ⅲ層上面において溝３条、土壙墓１基、集石１基、ピット３穴検出した。各溝やピットの覆土には宝永火山灰を含むことから、近世後半以降に埋没したと考えられる。なお集石と土壙墓は中近世と推測される第４号溝の埋没段階で掘られた遺構であり、近世の遺構とした。



第70図　近世遺構配置図(1/60)

第１項　溝

第１a号溝(第69～71図　図版９－２～４)

第１a号溝はＢ・Ｃ１・２グリッドに位置する。遺構は南西－北東方向に調査区を横断し、北東側と南西側は調査区外になる。第１b号溝および第４号溝と重複し、新旧関係は本遺構が最も新しい。また第１b号溝の埋没後に掘られたと考えられる。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-39.5°-E東偏を指す。残存規模は、長さ2.50ｍ、幅0.39～0.60ｍ、深さ29.9～47.2㎝を測る。底面は2.0㎝程度の凹凸はあるが概ね平坦である。また北東端部から南西端部へ約9.8㎝下降傾斜する。断面形状は、不整なＶ字状を呈する。覆土中に宝永パミス・スコリアを多く含む。溝の埋没後に第Ⅰb層が堆積し、また上面の一部分には、第Ⅰa層の掘り込みが観察された。

遺物は肥前産染付碗の体部２片(第71図第１a号溝P1・P2)が出土した。P1は18世紀中頃～後半、P2はこんにゃく印判で17世紀末～18世紀前半頃と推測される。いずれも細片のため図示には至らなかった。

遺構の時期は、覆土中に宝永火山灰を多く含み、18世紀前半以降と推測される。

第１b号溝(第69～72図　表39　図版９－３・４、図版13－１－１)

第１b号溝はＡ～Ｃ１・２グリッドに位置する。遺構は調査区西壁に沿って南西－北東方向に調査区を横断し、北東側、南西側と遺構の底面から西壁部分は調査区外になる。第１a号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古い。遺構の東壁上半部は、第１a号溝の掘り込みにより消失していた。座標軸と遺構東壁との偏差は、概ねN-43.0°-E東偏を指す。残存規模は、長さ2.48ｍ、幅0.57～0.73ｍ、深さ30.2～35.2㎝を測る。底面は約5.0㎝の起伏を有するが、概ね平坦である。断面形状は、底面から西壁の立ち上がりが未確認であるため不詳である。覆土の最上位に宝永パミスを少量含む。

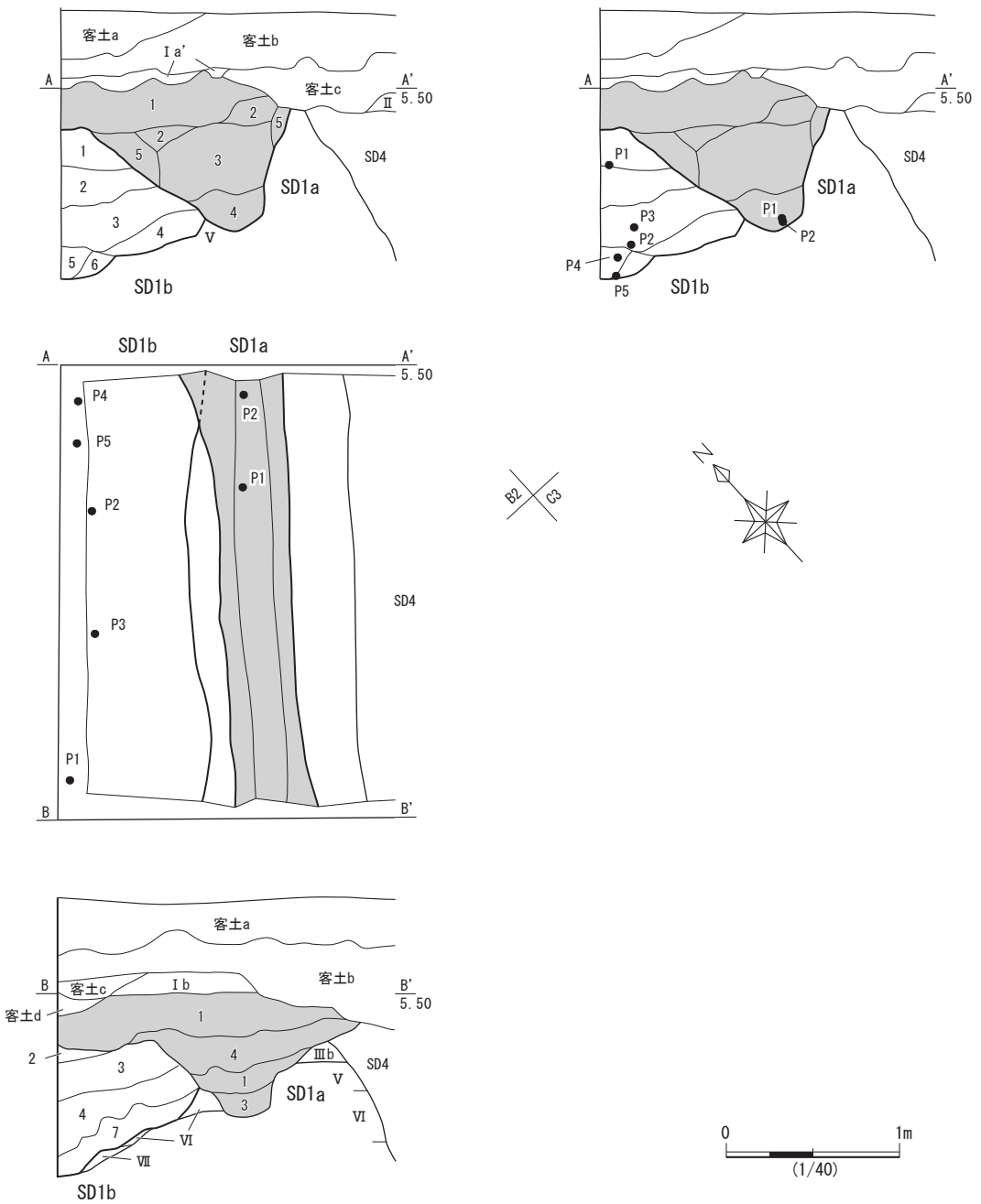
遺物は、相模型土師器坏１片4.4g、須恵器坏１片1.2g、甕１片140.7g、陶器３片208.0g、磁器１片8.9g、礫５点1,090.8gが出土し、このうち４点を図示した。

１は瀬戸産擂鉢の口縁～体部小片である。体部内面に櫛描き６条１単位のすり目を施す。縁帯上端部は磨滅しているが、これは転用による磨り痕の可能性がある。遺物の時期は、近世初頭～中頃と推測される。**２**は瀬戸産卸皿の底部小片である。見込みには卸目を施し、外周部分に灰釉が残存する。遺物の時期は、中世と推測される。**３**は常滑産こね鉢の体部片を再利用した転用陶片であり、外面と側面の３面に使用痕が観察された。遺物の時期は、中世と推測される。**４**は肥前産染付碗の体部～高台部片であり、見込みに五弁花文を施す。遺物の時期は、18世紀前半頃と推測される。

遺構の時期は、覆土最深部から18世紀前半頃の肥前産染付碗(P4)が出土し、18世紀前半頃と推測される。

第２号溝(第69・70・73・74図　表40　図版10－１、図版13－１－２)

第２号溝はＣ・Ｄ３・４グリッドに位置する。遺構は南西－北東方向に調査区を横断し、北東側と南西側は調査区外になる。座標軸と遺構東壁との偏差は、N-39°-E東偏を指す。残存規模は、長さ2.50ｍ、幅0.47～0.60ｍ、深さ12.6～16.8㎝を測る。断面形状は逆台形を呈する。底面は約5.0㎝の起伏を有するが、概ね平坦である。



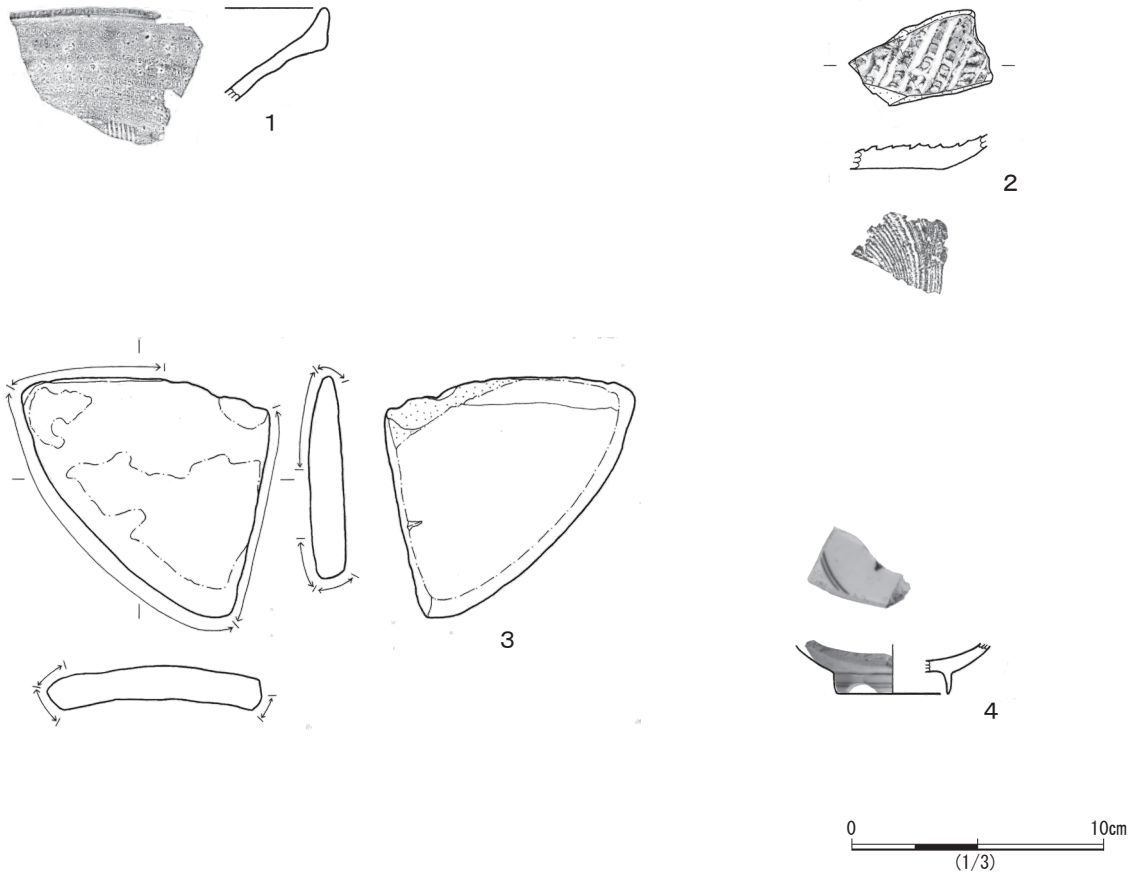
第１a号溝

第１層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまり弱い。粘性少ない。第Ⅰb層に似るがしまり弱く宝永パミス、スコリアを多く含む。
第２層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまり弱い。粘性少ない。宝永パミス、スコリアを多く含む。
第３層：黒褐色土(10YR2/1)	宝永火山灰主体層。
第４層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径3.0㎜を少量含む。
第５層：灰黄褐色土(10YR4/2)	第４層に似るがしまり増す。

第１b号溝

第１層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまりあり。粘性少ない。上部に宝永パミス径5.0㎜を少量含む。
第２層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまりあり。粘性ややあり。炭化物を少量含む。
第３層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまりやや強い。粘性ややあり。
第４層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまりあり。粘性ややあり。第Ⅴ層土ブロックを少量含む。
第５層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)	しまりあり。粘性ややあり。白色パミス径3.0㎜を少量含む。
第６層：褐色土(10YR4/4)	しまりあり。粘性あり。第Ⅴ層土ブロックを多く含む。
第７層：灰黄褐色土(10YR4/2)	第４層に比べ粘性強く第Ⅴ層土ブロック増す。

第71図　第１a号・１b号溝遺物分布(1/40)



第72図　第１b号溝出土遺物(1/3)

表39　第１b号溝出土遺物観察表

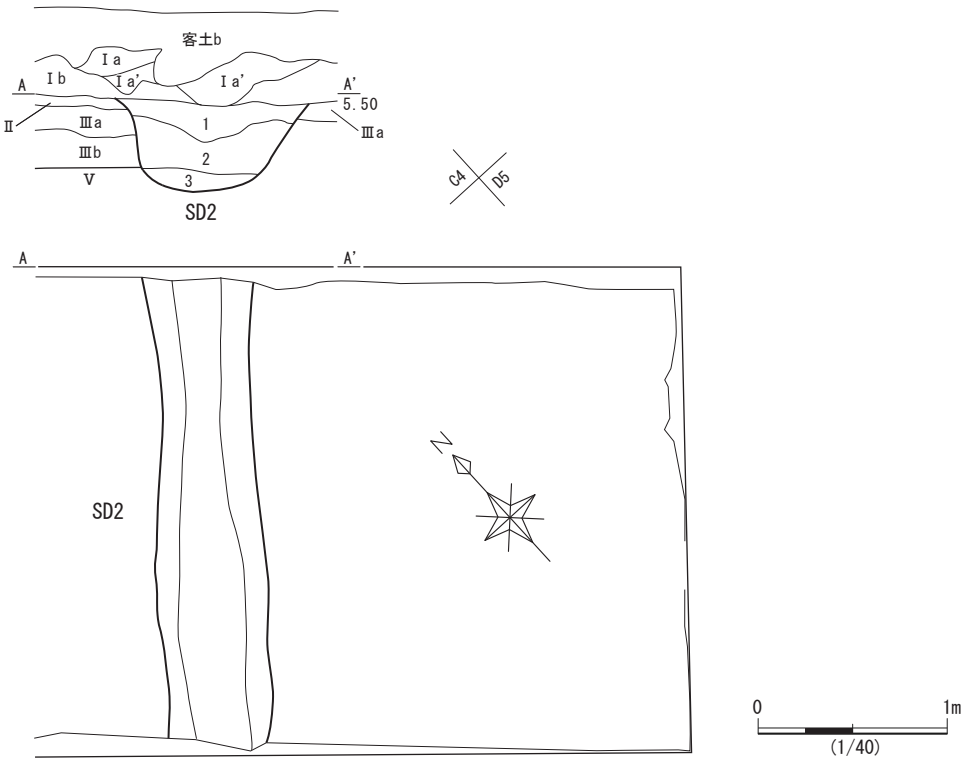
No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特　徴	出土位置
1	陶器 擂鉢	**口径**：(-) **底径**：- **残高**：3.7 **重量**：38.1g **残存**：口縁～体部小片	**胎土**：緻密　砂粒　白色粒　**焼成**：良好　**色調**：内外面 7.5YR6/2灰褐　胎土 10YR7/4にぶい黄橙 **せいけい**：粘土紐巻き上げ→轆轤成形　体部内面　櫛描き６条１単位のすり目　**施釉**：内外面 鉄釉 **産地**：瀬戸**年代**：近世初頭～中頃　**備考**：縁帯上端部磨滅し転用による磨り痕の可能性あり	SD1b P1
2	陶器 卸皿	**口径**：- **底径**：(-) **残高**：1.4 **重量**：21.8g **残存**：底部小片	**胎土**：緻密　砂粒　**焼成**：良好　**色調**：胎土 2.5Y7/2 灰黄　**せいけい**：轆轤成形　底部外面 回転糸切り　見込み：卸目　**釉**：見込み外周 灰釉　**産地**：瀬戸 **年代**：中世	SD1b P5
3	陶器 こね鉢 転用陶片	**長さ**：9.55 **幅**：9.85 **厚さ**：1.4 **重量**：148.1g **残存**：口縁～体部小片	**産地**：常滑　**年代**：中世　**備考**：外面１面と側面３面使用	SD1b P3
4	磁器 碗	**口径**：- **高台径**：(4.4) **残高**：1.9 **重量**：8.9g **残存**：体部～高台部1/4	**胎土**：精良 砂粒　**焼成**：堅緻　**色調**：胎土 白 **せいけい**：轆轤成形　**絵付**：染付　**文様**：見込み　二重圏線・五弁花文　高台部外面 二重圏線 **産地**：肥前　**年代**：18世紀前半	SD1b P4

No.は第72図の遺物番号に対応し、出土位置の遺物番号は第71図中の遺物番号に対応する

遺物は相模型土師器坏２片5.9g、甕５片6.4g、陶器碗１片4.1g、鉄製品１点11.7gが出土し、このうち鉄製品１点を図示した。

１は角釘と推測される。胴部片であり全長は不詳であるが、幅と厚さは0.50㎝以上、原寸で２寸弱を測り、３寸以上の大型の個体が想定される。

遺構の時期は、覆土の特徴から18世紀代以降と推測される。



第２号溝

第１層：灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径3.0㎜を含む。

第２層：灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりややあり。粘性少ない。宝永パミス径3.0㎜、褐色土ブロックを少量含む。

第３層：灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり弱い。粘性少ない。宝永パミス径2.0㎜を少量含む。

第73図　第２号溝(1/40)

第74図　第２号溝出土遺物(1/2)

表40　第２号溝出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特　徴	出土位置
1	鉄製品 角釘	**長さ**：(5.50)　**幅**：0.60 **厚さ**：0.55 **重量**：11.7g **残存**：不詳	**備考**：両端部欠損	SD2 覆土一括

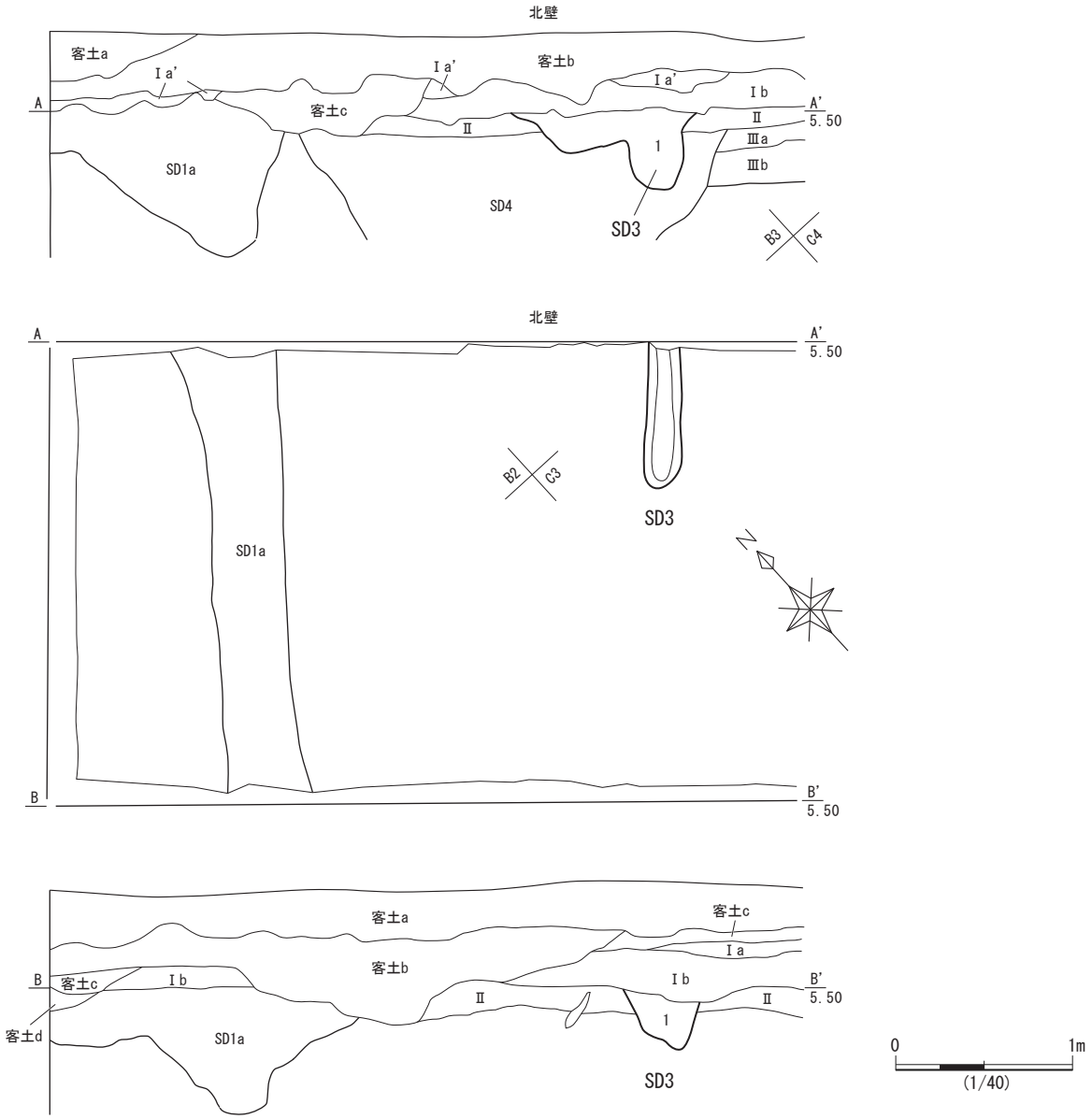
No.は第74図の遺物番号に対応する

第３号溝(第69・70・75図　図版11－１)

第３号溝は、Ｂ・Ｃ３グリッドに位置する。調査区中央部に遺構の南端部を有し、北東方向へ伸びた後調査区外となる。第Ⅱ層を掘り込むことを確認した。溝南側延長上の南壁断面には、概ね同じ高さに同様の掘り込みが観察され、断続的に南側へ延びるものと考えられる。座標軸と遺構主軸方向との偏差は、N-42.5°-E東偏を指す。残存規模は、長さ0.82m、幅0.18～0.21m、深さ3.3～4.8cmを測り、概ね溝の底面にあたり、約5.0cmの起伏を有するが概ね平坦である。断面形状は不整な逆台形またはU字形を呈する。遺構の性格は、両壁断面の形状や断続的に南壁断面へ接続することが想定され、畝である可能性がある。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土中に宝永パミスを含み、18世紀代以降と推測される。



第３号溝
第１層：灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりややあり。粘性なし。宝永パミス径5.0mmを多く含む。

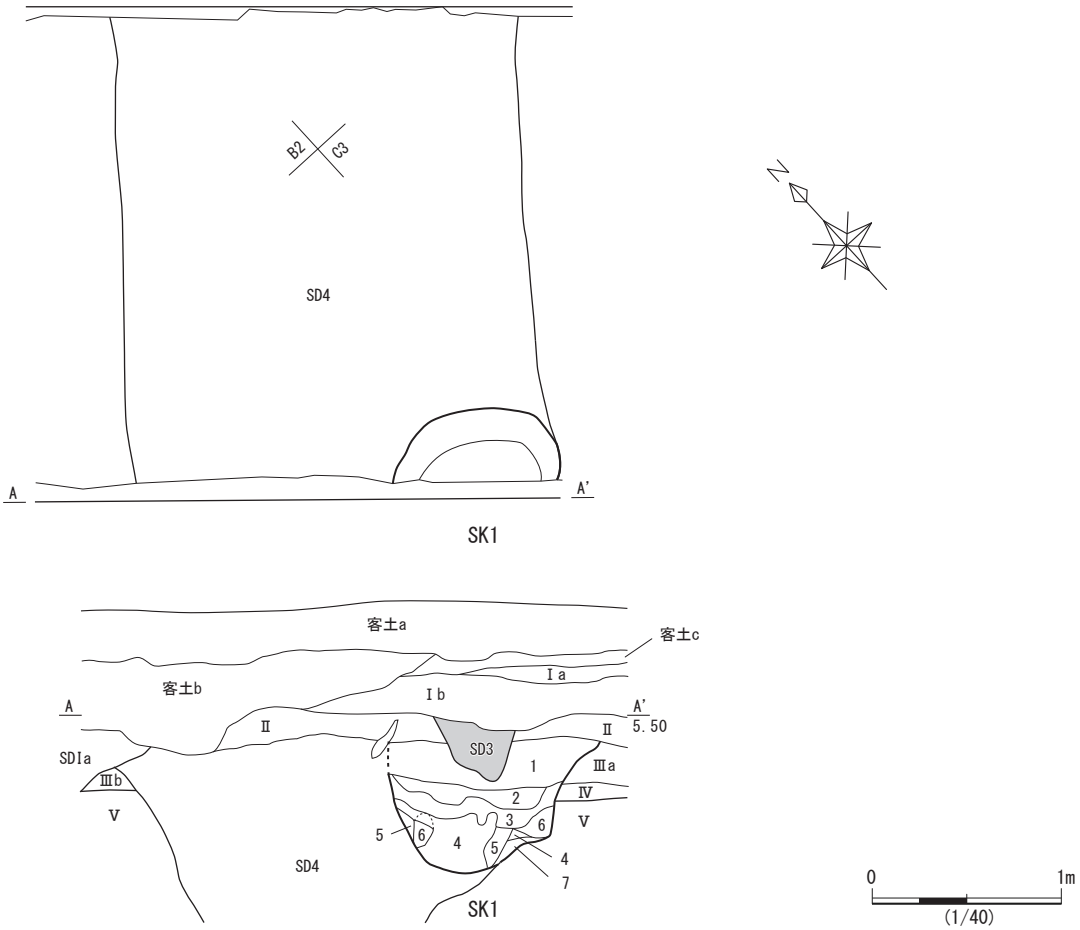
第75図　第３号溝(1/40)

第２項　土壙墓

第１号土壙墓（第69・70・76・77図　図版10－２～４）

第１号土壙墓は、Ｃ・Ｄ２グリッドに位置する。調査区中央部南壁沿いで検出した。遺構の南半部は調査区外にあたる。第４号溝と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。南壁土層断面の観察によれば、第４号溝が完全に埋没する前のいわば凹地であった段階で第１号土壙墓が掘られ、また遺構の上位には第Ⅱ層が堆積することを確認した。平面形状は楕円形を呈すると推測される。残存規模は、長軸0.87ｍ、短軸0.39ｍを測る。断面形状は不整な逆台形または擂鉢状を呈し、深さ4.1～19.3㎝の中端を有して最深部は36.4㎝を測る。

遺構の時期は、第４号溝の埋没時期にあたり近世前半頃と推測される。



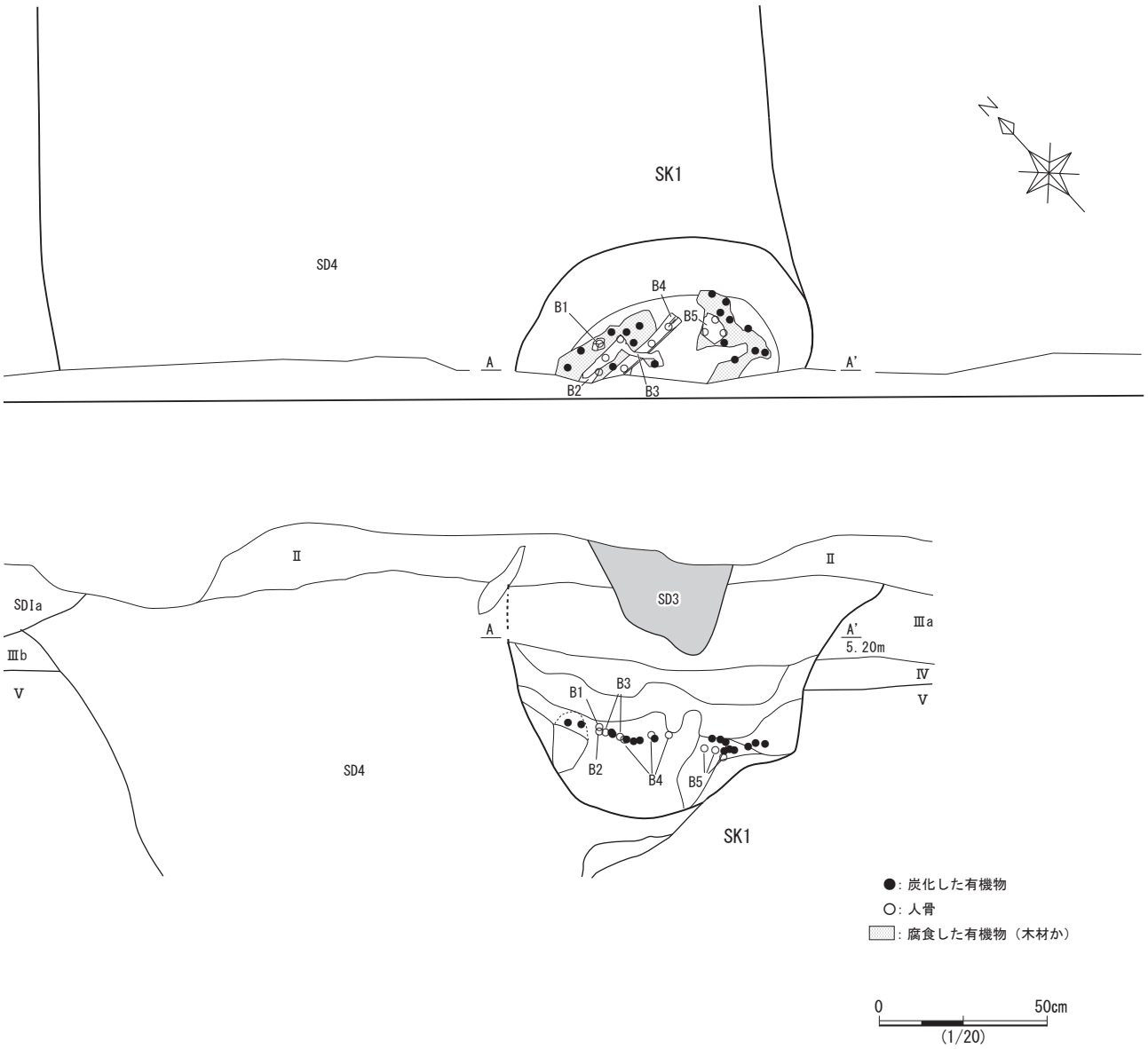
第１号土壙墓

第１層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり強い。粘性ややあり。橙色スコリア径1.0㎜を少量含む。白色パミス径2.0㎜を少量含む。
第２層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。橙色スコリア径1.0㎜を少量含む。白色パミス径2.0㎜を少量含む。炭化物を含む。
第３層：灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり弱い。粘性ややあり。骨・腐食した有機物を含む。
第４層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。橙色スコリア、白色パミス径1.0㎜をわずかに含む。
第５層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり極めて強い。粘性ややあり。白色パミス径3.0㎜を少量含む。
第６層：褐色土(10YR4/4)　しまり強い。粘性あり。第Ⅴ層に似る。
第７層：にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。第Ⅵ層土ブロックを多く含む。

第76図　第１号土壙墓(1/40)

遺物は相模型土師器坏１片0.6g、甕１片0.3g、須恵器坏１片2.6g、甕１片9.9g、礫２点16.6g、人骨５点139.9gが出土したが、図示には至らなかった。遺構の時期を示す遺物はなかった。

土坑の底面から約20.0㎝上の高さから骨とともに炭化した有機物が纏まって検出された。骨を検出した標高は約4.8ｍであり、東側がやや低くなる。一部の骨(第77図B4)の残存状況は良好であったが、それ以外の骨や有機物はもろく形を遺すのが困難であった。なおB4は、脚部片の可能性がある。



第77図　第１号土壙墓遺物分布(1/20)

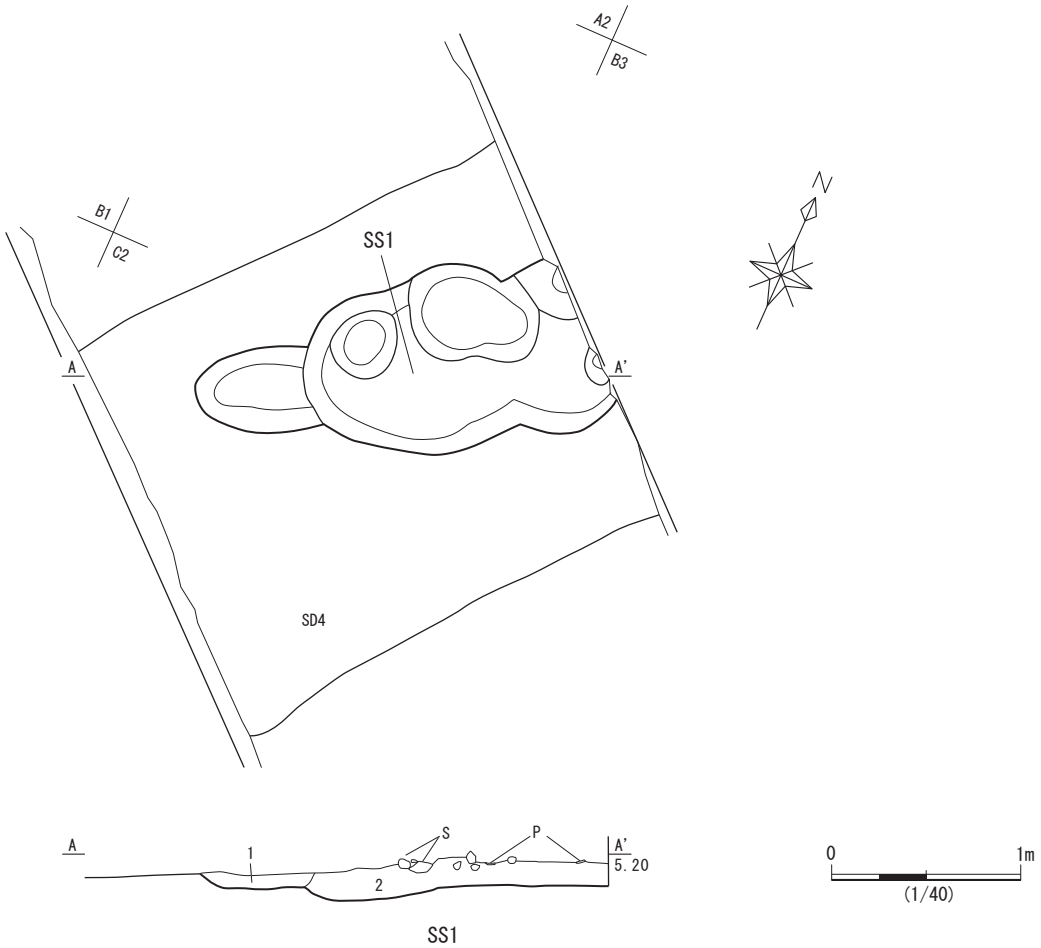
第３項　集石

第１号集石（第69・70・78～80図　表41　図版10－５～７、図版13－１－３）

第１号集石は、Ｂ・Ｃ２・３グリッドに位置する。第４号溝と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。遺構の北東部は調査区外にあたるが、第４号溝内の北東側約2/3を占める。北壁土層断面の観察によれば、第４号溝が完全に埋没する前のいわば凹地であった段階で第１号集石が形成され、また遺構の上位には第Ⅱ層が堆積することを確認した。平面形状は不定形を呈する。浅い土坑状またはピット状の窪みが重複しつつ連続する様相が窺われ、簡易な掘り込みを伴うと推測される。残存規模は、全長2.21ｍ、幅は先端部で0.46ｍ、平坦面で0.90～1.00ｍ、深さは先端部で5.7㎝、平坦面で9.7～14.9㎝、窪み部分で12.3～16.3㎝を測る。

検出された礫は、標高5.20ｍ前後の第４号溝第１層と第２層の境付近を中心に分布しており、短期間のうちに形成されたと考えられる。

遺構の時期は、第４号溝の埋没時期にあたり近世前半頃と推測される。



第１号集石

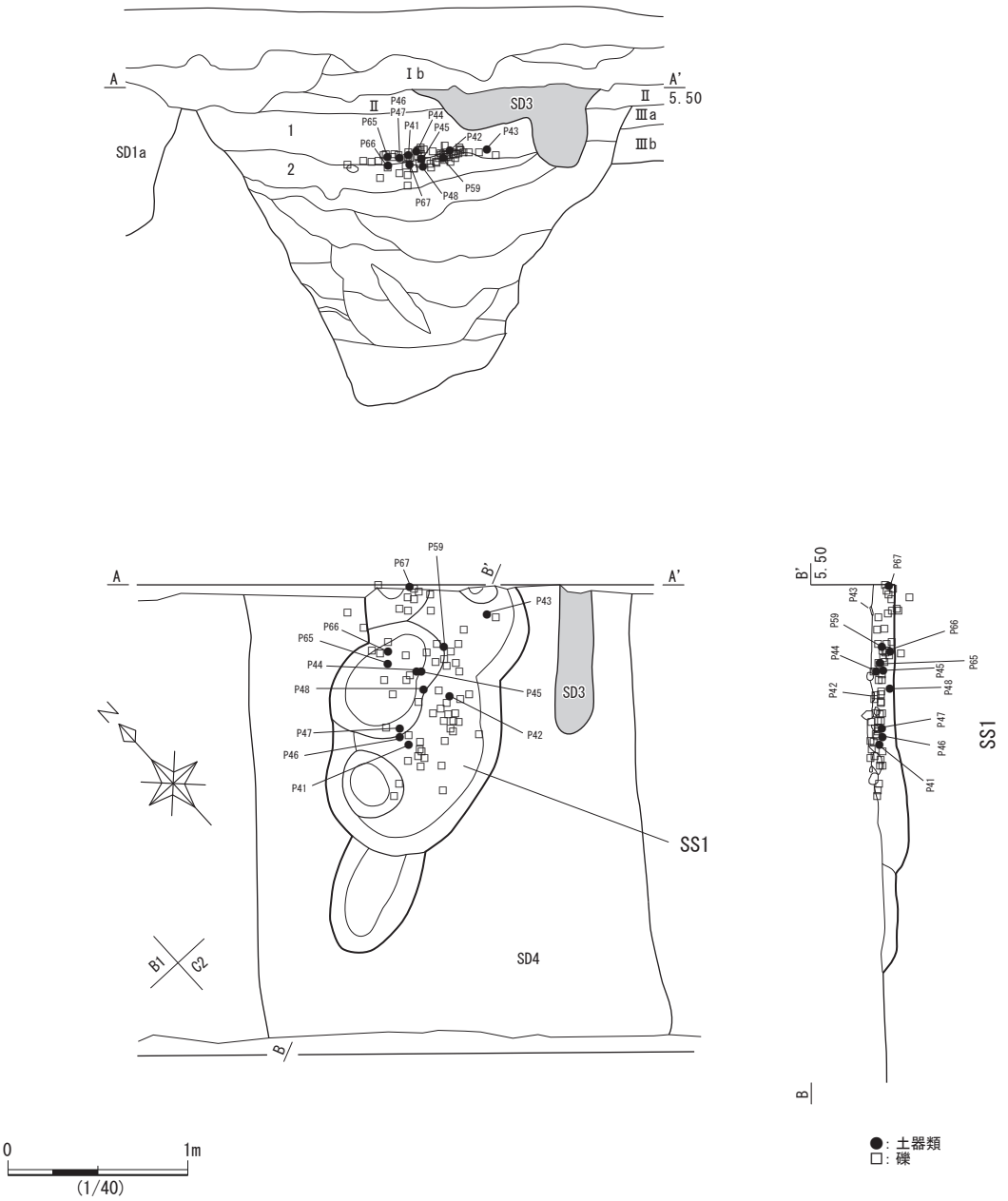
第１層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）　しまりあり。粘性ややあり。暗褐色土ブロック混じる。橙色スコリア径1.0㎜を少量含む。

第２層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）　しまりややあり。粘性ややあり。暗褐色土ブロックが少量混じる。橙色スコリア径1.0㎜を少量含む。

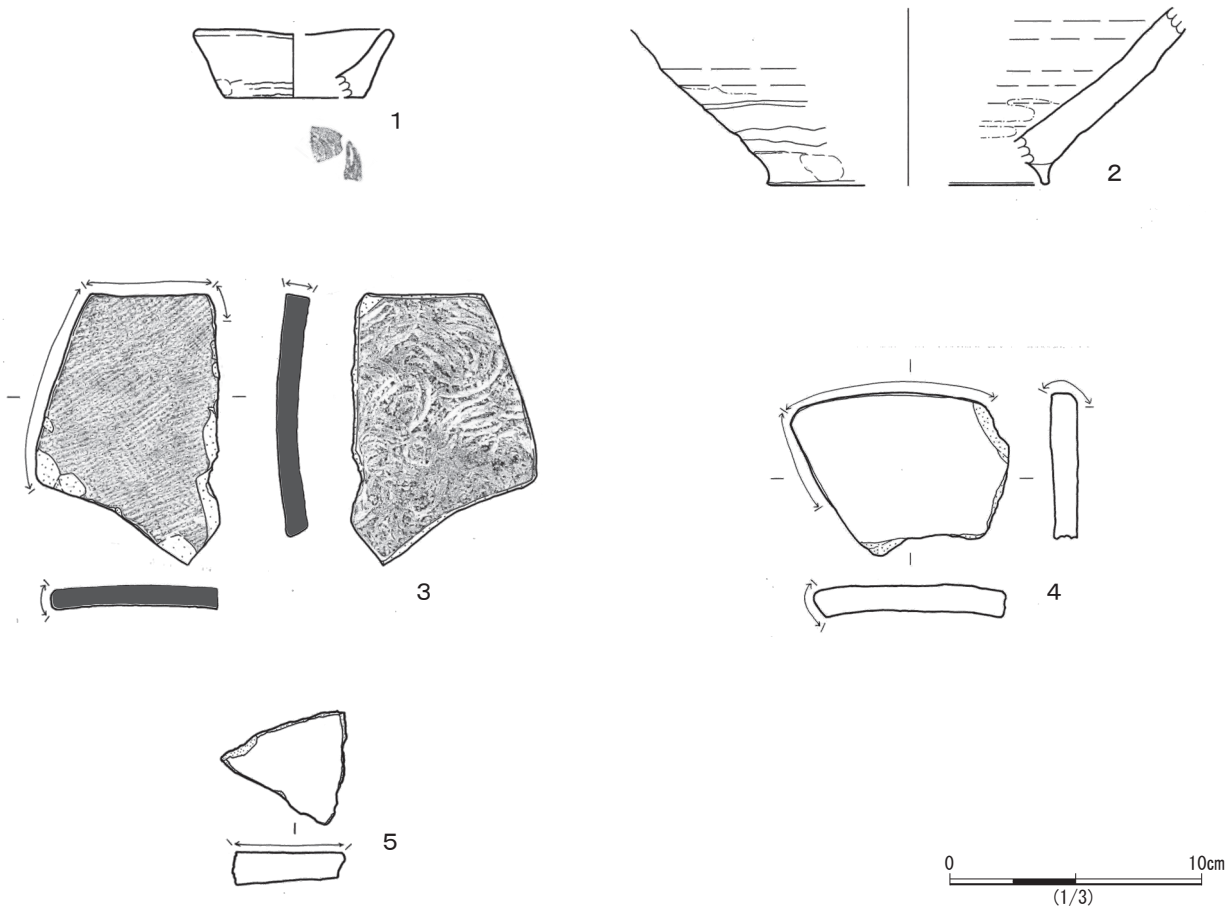
第78図　第１号集石（1/40）

遺物は、相模型土師器坏４片8.9g、甕15片21.1g、須恵器甕７片357.4g、かわらけ２片21.7g、陶器４片394.8g、青磁１片1.3g、石製品１点34.8g、礫67点11,562.5gが出土した。青磁は同安窯系の遺物であるが、時期不明であった。このうち５点を図示した。

１はかわらけであり、P46とP47が接合した。器形は逆台形を呈し腰が張り、器肉が厚い。遺物の時期は、器形の特徴から15世紀末～16世紀初頭と推測される。２は常滑産片口鉢Ⅰ類１片である(P41)。遺物の時期は、13世紀中頃と推測される。３は須恵器甕胴部の転用砥石であり(P48)、側面２面に使用痕を有する。また別側面の一部も磨滅している。４は常滑産陶器こね鉢の転用陶片であり(P45)、側面２面に使用痕を有する。５は陶器の細片であり、器種は甕または鉢の底部外縁である可能性がある(P43)。胎土には滑石を多く含み、東海系の所産と推測される。上面１面は強く磨滅し、転用陶片として再利用された可能性がある。



第79図　第１号集石遺物分布(1/40)



第80図　第１号集石出土遺物(1/3)

表41　第１号集石出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特　徴	出土位置
1	かわらけ 皿	**口径**：(7.6) **底径**：(5.6) **残高**：2.5～2.7 **重量**：21.7g **残存**：口縁～体部1/5 底部1/4	**胎土**：緻密　砂粒　橙色粒　角閃石　白色骨針状物質 **焼成**：良好　**色調**：内外面　7.5YR6/6橙　**せいけい**：ロクロ成形　底部外面　回転糸切り　板状圧痕　底外部　指頭痕　**年代**：15世紀末～16世紀初頭　**接合**：P46+P47　**備考**：口縁部の歪み大きい	SS1 P46+P47
2	陶器 こね鉢	**口径**：－ **底径**：(11.1) **残高**：6.9 **重量**：116.6g **残存**：体部～高台部1/6	**胎土**：緻密　砂粒　白色粒　**焼成**：良好　**色調**：内外面　7.5YR6/6橙　**せいけい**：粘土紐巻き上げ→轆轤成形　体部外面下位　ヘラケズリ　貼付け高台 **産地**：常滑　片口鉢Ⅰ類　**年代**：13世紀中頃	SS1 P41
3	須恵器 甕 転用砥石	**長さ**：10.65　**幅**：7.3 **厚さ**：0.85 **重量**：101.4g **残存**：胴部小片	**備考**：側面２面全体と３面の一部使用	SS1 P48
4	陶器 こね鉢 転用陶片	**長さ**：6.5　**幅**：8.6 **厚さ**：0.9～1.1 **重量**：81.8g **残存**：口縁～体部小片	**産地**：常滑　**年代**：中世　**備考**：側面２面使用	SS1 P45
5	陶器 甕・鉢 転用陶片	**長さ**：5.0　**幅**：4.5 **厚さ**：1.0～1.3 **重量**：34.8g **残存**：細片	**産地**：東海系	SS1 P43

No.は第80図の遺物番号に対応し、出土位置の遺物番号は第79図中の遺物番号に対応する

第４項　ピット

第１号ピット(第69・70・81図　表43　図版11－２)

第１号ピットは、Ｅ４グリッドに位置し隣接する。南壁・東壁土層断面の観察から、第１・２号ピットの規模は幅70.0㎝以上、深さ50.0㎝以上を測り、共通性を有する。残存規模は、表43のとおりである。

遺物は、土師器甕１片0.7gが出土した。細片のため図示には至らなかった。

遺構の時期は、覆土中に宝永パミスを含み、近世後半以降と推測される。

第２号ピット(第69・70・81・82図　表42・43　図版11－２、図版14－１－１)

第２号ピットは、Ｅ４グリッドに位置し隣接する。残存規模は、表43のとおりである。

遺物は、鉄製品１点１片102.6gが出土し、これを図示した。

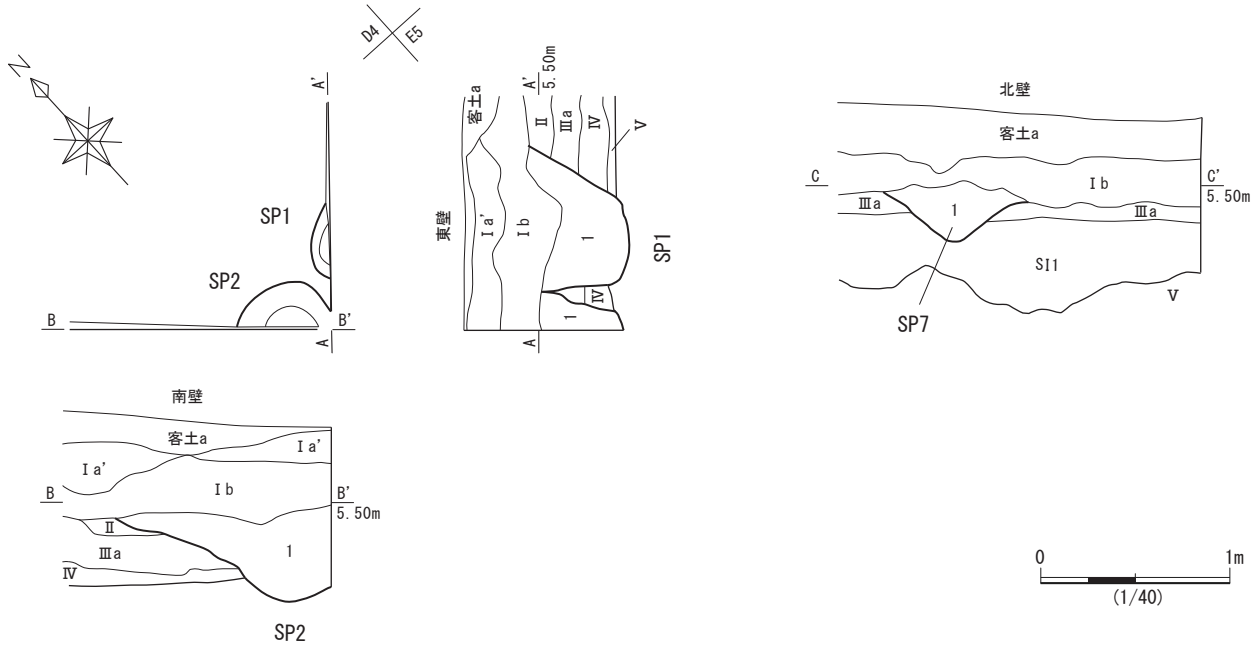
１の器種は不詳である。

遺構の時期は、覆土中に宝永パミスを含み、近世後半以降と推測される。

第７号ピット(第81図　表43)

第７号ピットは、北壁土層断面で確認した。残存規模は、表43のとおりである。

遺構の時期は、覆土中に宝永パミスを含み、近世後半以降と推測される。

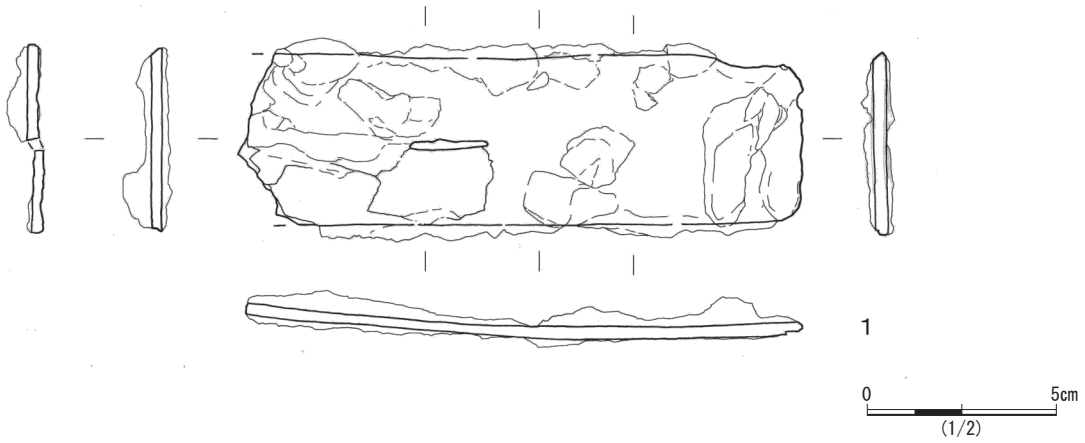


第１号ピット
第１層：灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径5.0㎜を含む。

第２号ピット
第１層：灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径5.0㎜を含む。褐色土ブロックを少量含む。

第７号ピット
第１層：灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径3.0㎜を含む。

第81図　第１号・２号・７号ピット(1/40)



第82図　第２号ピット出土遺物(1/2)

表42　第２号ピット出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特　徴	出土位置
1	鉄製品 板状製品	**長さ**：(14.9) **幅**：4.9 **厚さ**：0.60 **重量**：102.6g **残存**：不詳	**備考**：中央部に長さ2.0cmの貫通箇所がある	SP2 覆土一括

No.は第82図の遺物番号に対応する

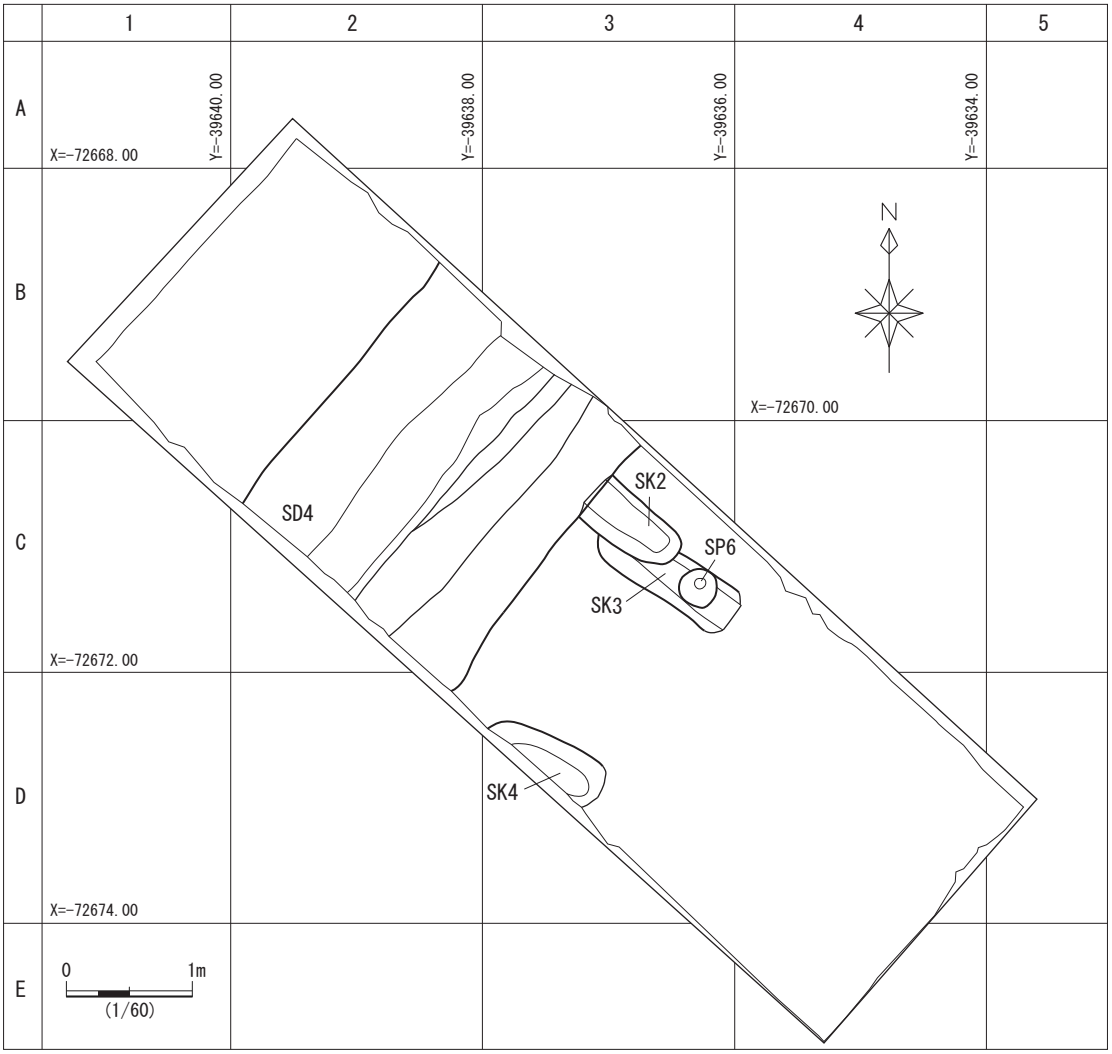
表43　近世ピット計測表

番号	平面 形状	断面 形状	計測値（cm）			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP1	―	逆台形	(39.0)	(10.0)	5.9	土師器甕１片 0.7g
SP2	楕円形	逆台形	(54.0)	(24.0)	14.0	―
SP7	―	Ｖ字形	76.0	-	32.0	―

番号は第69・70・81図中のピット番号に対応する

第２節　中世～近世

検出した遺構は溝１条、土坑３基、ピット１穴である。覆土はにぶい黄褐色土、暗褐色土を呈し、周辺の中世文化層に類似することから当該期と判断した。遺構はいずれも第Ⅳ・Ⅴ層上面で確認した。各遺構の重複関係と覆土の様相から、各土坑は溝より古いと考えられる。



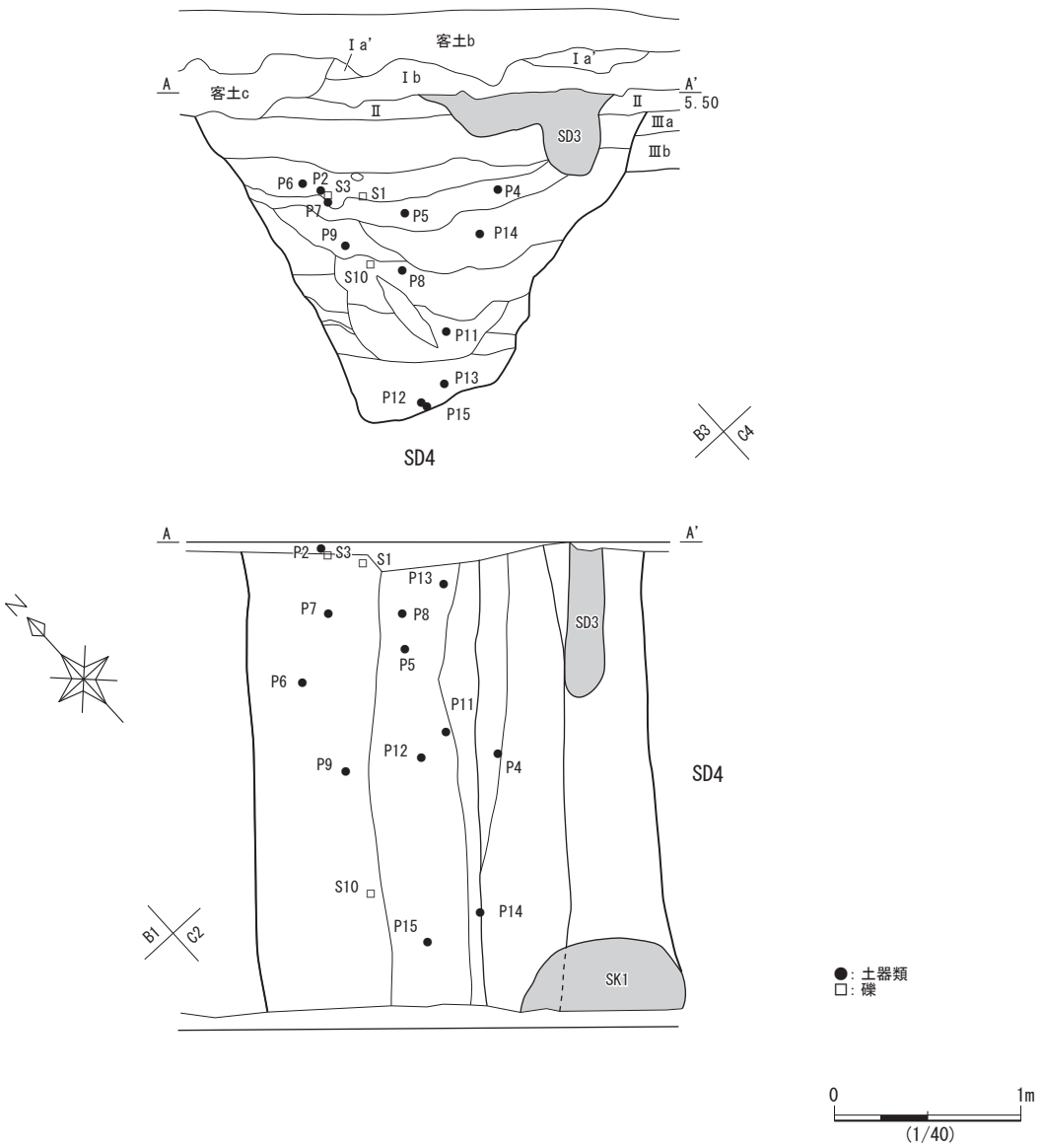
第83図　中世～近世遺構配置図(1/60)

第１項　溝

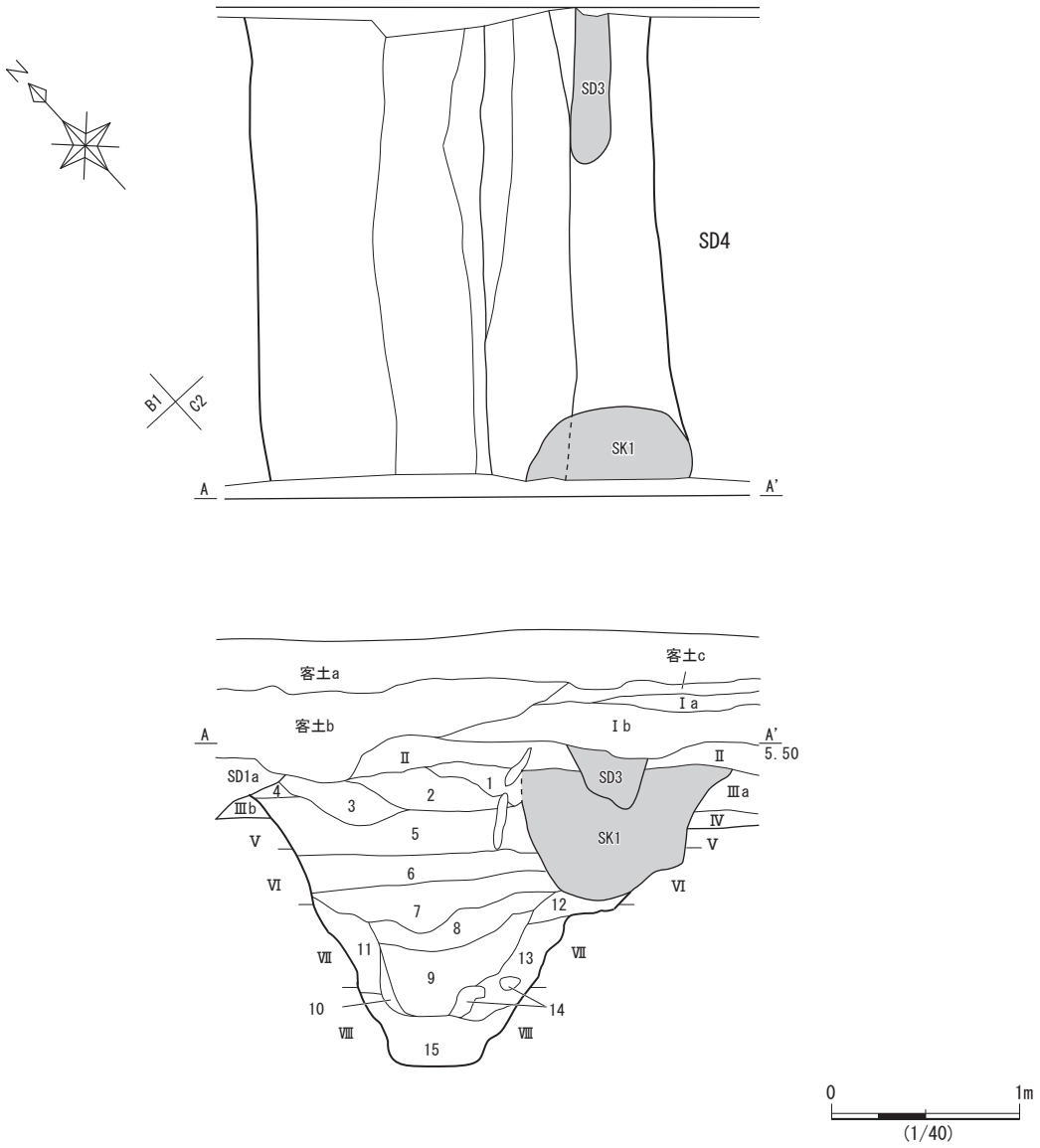
第４号溝（第69・83～86図　表44　図版11－３・４、図版14－２－１）

第４号溝は、Ｂ～Ｄ２・３グリッドに位置する。遺構は南西－北東方向に調査区を横断し、北東側と南西側は調査区外になる。第１a号溝、第３号溝、第１号集石や第１号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が最も古い。座標軸と遺構主軸方向の偏差は、概ねN-39.5°-E東偏を指す。遺構の上位には第Ⅱ層が堆積することを確認した。また覆土の様相から少なくとも一度の掘り直しが行われた可能性がある。残存規模は、長さ2.51ｍ、幅2.12～2.23ｍ、深さ1.35～1.38ｍを測る。底面は約5.0㎝の起伏を有するが、概ね平坦である。断面形状は、逆台形を呈する。

遺構の時期は、覆土中には宝永火山灰を含まないため、中世後半～近世前半頃と推測される。



第84図　第４号溝遺物分布(1/40)



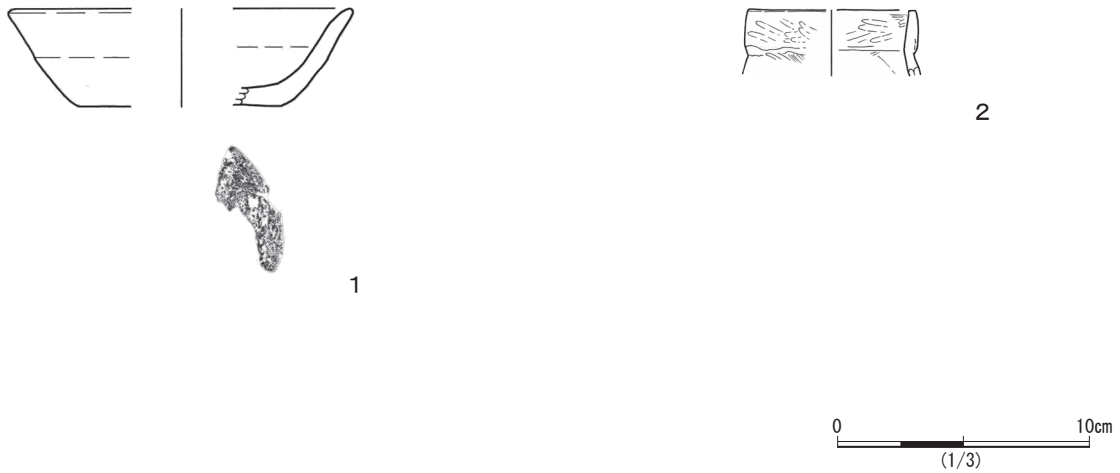
第４号溝

第１層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり強い。粘性ややあり。橙色スコリア径5.0㎜を少量含む。
第２層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり粘性あり。橙色スコリア、白色パミス径2.0㎜を含む。暗褐色土ブロックを少量含む。
第３層：暗褐色土(10YR3/3)　しまり強い。粘性ややあり。橙色スコリア径3.0㎜を含む。暗褐色土ブロックを多く含む。
第４層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり強い。粘性ややあり。橙色スコリア径1.0㎜をわずかに含む。
第５層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり極めて強い。粘性ややあり。橙色スコリア、白色パミス径2.0㎜を含む。
第６層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりややあり。粘性ややあり。橙色スコリア、白色パミス径1.0㎜を含む。
第７層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり強く粘性ややあり。青灰色粘土をまばらに含む。橙色スコリア、白色パミス径1.0㎜を含む。
第８層：にぶい黄褐色土(10YR5/3)　しまり強い。粘性あり。青灰色粘土を多く含む。鉄分を多く含む。
第９層：にぶい黄褐色土(10YR5/3)　しまりやや強い。粘性あり。青灰色粘土、鉄分を含む。黒色スコリア径5.0㎜を少量含む。
第10層：にぶい黄褐色土(10YR5/3)　第11層に似るがしまり強い。炭化物含む。
第11層：にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。第Ⅵ層ブロックを含む。
第12層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりあり。粘性ややあり。第Ⅴ層ブロックを少量含む。
第13層：にぶい黄褐色土(10YR5/3)　しまり強い。粘性あり。橙色スコリア、白色パミス径1.0㎜を少量含む。灰色粘土を含む。
第14層：暗褐色土(10YR3/3)　しまり強い。粘性あり。第13層をまばらに含む。
第15層：にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまり弱い。粘性やや強い。鉄分を含む。

第85図　第４号溝(1/40)

遺物は、土師器壺１片7.6g、相模型土師器坏12片31.7g、甕36片131.1g、須恵器甕６片137.4g、灰釉陶器１片2.7g、かわらけ２片33.7g、陶器４片105.2g、磁器１片1.1g、石製品１点75.8g、礫28点4,245.5g、骨片４点5.4gが出土した。このうち２点を図示した。

１はかわらけであり、器形は大型で器高が高い。遺物の時期は、器形の特徴から13世紀代と推測される。２は小型壺の口縁～頸部片である。遺物の時期は、古墳時代前期と推測される。



第86図　第４号溝出土遺物(1/3)

表44　第４号溝出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特　徴	出土位置
1	かわらけ	**口径**：(13.6) **底径**：(8.0)　**器高**：3.85 **重量**：30.3g **残存**：1/6	**胎土**：緻密　砂粒　赤褐色粒　泥岩　白色骨針状物質 **焼成**：良好　**色調**：外面　5YR6/6橙　内面　5YR6/8橙 **せいけい**：ロクロ成形→ナデ　**年代**：13世紀代 **備考**：胎土は鎌倉出土のかわらけに類似する	SD4 P5
2	土師器 小型壺	**口径**：(6.6)　**底径**：－ **残高**：3.0 **重量**：7.6g **残存**：口縁～頸部1/6	**胎土**：緻密　砂粒　橙色粒　白色骨針状物質　角閃石 **焼成**：良好　**色調**：外面　2.5YR5/4にぶい赤褐　内面　2.5YR5/6明赤褐(赤彩)　**せいけい**：内外面　ヘラナデ　頸部外面　斜め下ヘラナデ→口縁部ヨコナデ→口縁部内面　ミガキ状の横ヘラナデ　**年代**：古墳時代前期	SD4 覆土一括

No.は第86図の遺物番号に対応し、出土位置の遺物番号は第84図中の遺物番号に対応する

第２項　土坑

第２号土坑（第69・83・87図　図版11－５）

第２号土坑は、Ｃ３グリッドに位置する。調査区中央部に遺構の東端部を有し、北西方向へ延びた後第４号溝の掘り込みにより消失する。新旧関係は第４号溝より古い。平面形状は長楕円形を呈する。座標軸と主軸方向との偏差は、N-48.5°-W西偏を指す。残存規模は、長軸0.83ｍ、短軸0.42ｍ、深さ11.0～12.7㎝を測る。概ね遺構の底面にあたると推測され、約6.0㎝の起伏を有するが概ね平坦である。断面形状は、Ｕ字形を呈する。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、重複する第３号土坑と同時期と推測される。

第３号土坑（第69・83・87図　図版11－５）

第３号土坑は、Ｃ３・４グリッドに位置する。調査区中央部に遺構の西端部を有し、南東方向へ延びた後第２号溝の掘り込みにより消失する。第２号溝、第２号土坑および第６号ピットと重複し、新旧関係は本遺構が最も古い。平面形状は長楕円形を呈する。座標軸と主軸方向との偏差は、N-56.0°-W西偏を指す。残存規模は、長軸1.24ｍ、短軸0.40ｍ、深さ10.2～19.0㎝を測る。底面は約3.0㎝の凹凸を有するが、概ね平坦である。断面形状は、Ｕ字形を呈する。

遺物は、相模型土師器坏３片1.8gが出土したが、図示には至らなかった。

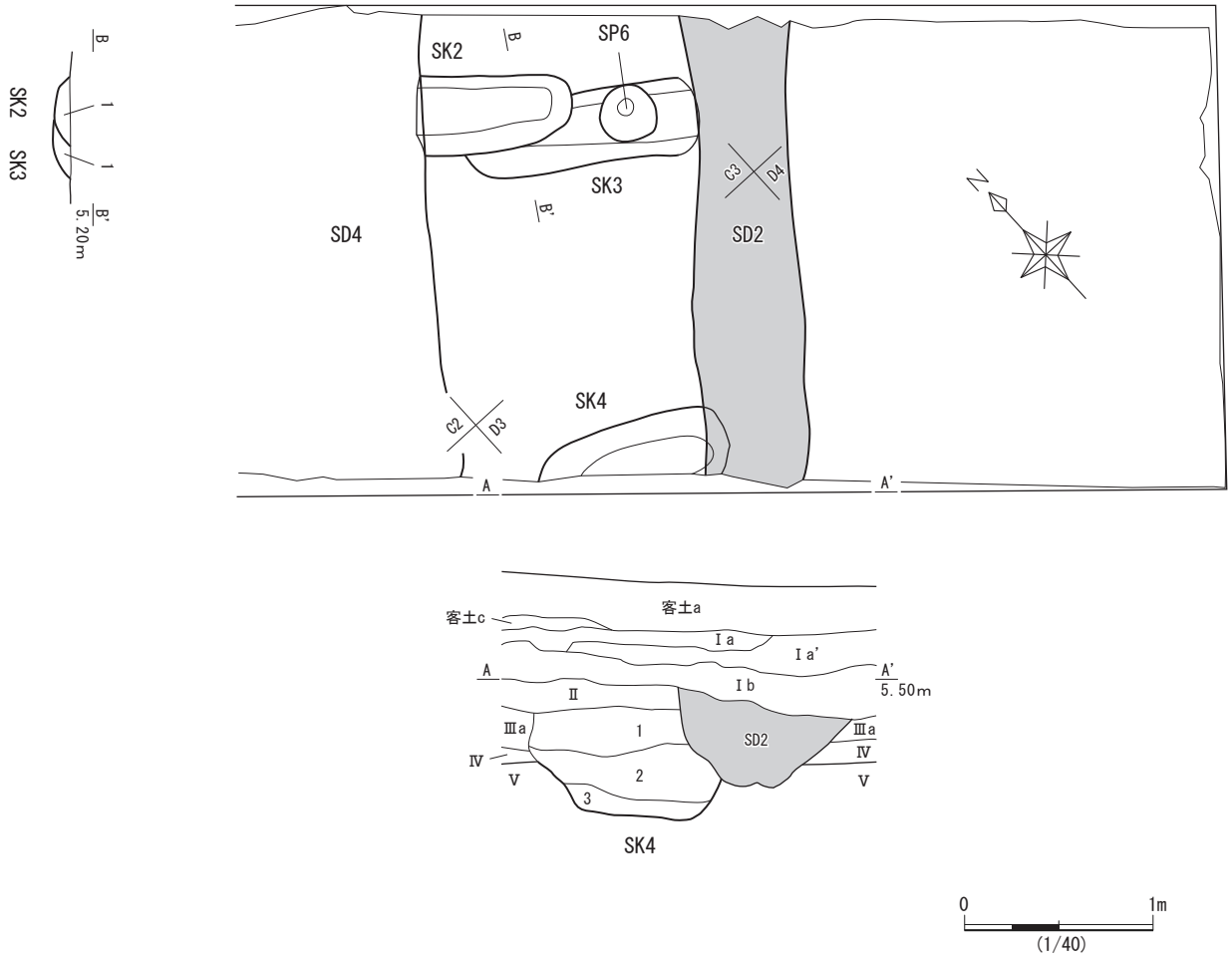
遺構の時期は、後述する第１号竪穴址より新しく第４号溝の頃と推測されるが判断材料に乏しく、幅をもたせて中世～近世と推測される。

第４号土坑（第69・83・87図　図版11－７）

第４号土坑は、Ｄ３グリッドに位置する。また第Ⅲa層上面から掘り込まれることを確認した。遺構の南西側は、調査区外となる。第２号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古い。平面形状は長楕円形を呈すると推測される。座標軸と主軸方向との偏差は、N-63.5°-W西偏を指す。残存規模は、長軸1.03ｍ、短軸0.35ｍ、深さ27.5～31.8㎝を測る。底面は約5.0㎝の凹凸を有するが、概ね平坦である。断面形状は、逆台形を呈する。

遺物は、相模型土師器坏２片2.2g、甕１片0.1gが出土したが、図示には至らなかった。

遺構の時期は、判断材料に乏しく、平面形状が似る第２・３号土坑と並ぶことから、両遺構と同時期の可能性がある。



第２号土坑

第１層：暗褐色土(10YR3/3)　　しまり強い。粘性あり。橙色スコリア含む。黄褐色土ブロックを多く含む。

第３号土坑

第１層：暗褐色土(10YR3/3)　　しまり極めて強い。粘性あり。橙色スコリア含む。黄褐色土ブロックを少量含む。

第４号土坑

第１層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり強い。粘性あり。橙色スコリア径1.0㎜をわずかに含む。
第２層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり強い。粘性あり。橙色スコリア径1.0㎜をわずかに含む。褐色土ブロックを少量含む。
第３層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりあり。粘性あり。橙色スコリア径1.0㎜をわずかに含む。

第87図　第２号・３号・４号土坑(1/40)

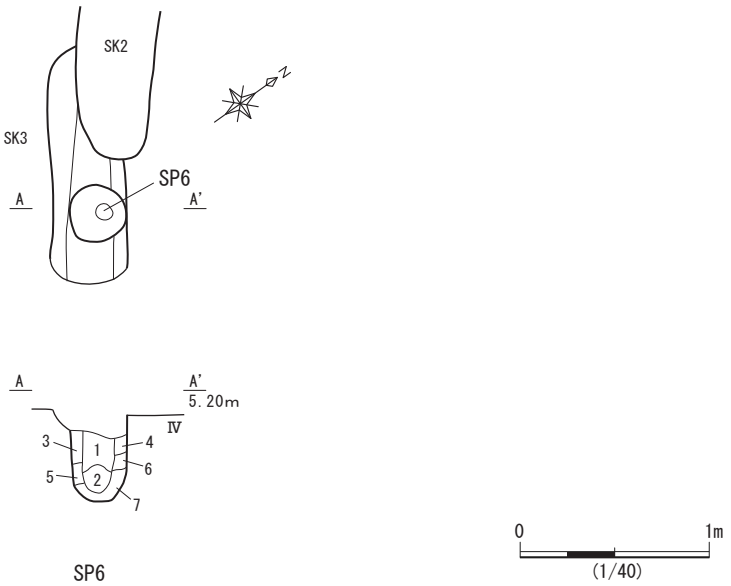
第３項　ピット

第６号ピット（第69・83・87・88図　表45　図版11－６）

第６号ピットは、Ｃ３グリッドに位置する。第３号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。残存規模は、表45のとおりである。遺構の性格は、覆土の堆積状況から柱穴の可能性がある。

遺物は、相模型土師器甕１片1.5g、礫１点0.5gが出土したが、図示には至らなかった。

遺構の時期は、重複する第３号土坑の年代観や覆土の特徴から中世～近世と推測される。



第６号ピット
第１層：暗褐色土（10YR3/3）　しまり強い。粘性あり。橙色スコリアを含む。褐色土ブロックを斑に含む。炭化物をごくわずかに含む。
第２層：暗褐色土（10YR3/3）　しまり強い。粘性あり。黄褐色土ブロックを含む。橙色スコリアをわずかに含む。
第３層：暗褐色土（10YR3/3）　しまりあり。粘性あり。黄褐色土ブロックをわずかに含む。
第４層：暗褐色土（10YR3/3）　しまりあり。粘性あり。全体に黄褐色土ブロックを含む。
第５層：暗褐色土（10YR3/3）　しまりあり。粘性あり。第３層よりも黄褐色土ブロックを多く含み色調明るい。
第６層：暗褐色土（10YR3/3）　第４層に似るが第４層に比べ色調暗い。
第７層：暗褐色土（10YR3/3）　しまり強い。粘性あり。土質は第Ⅴ層に近くなるが色調は第Ⅴ層よりも暗い。

第88図　第６号ピット（1/40）

表45　第６号ピット計測表

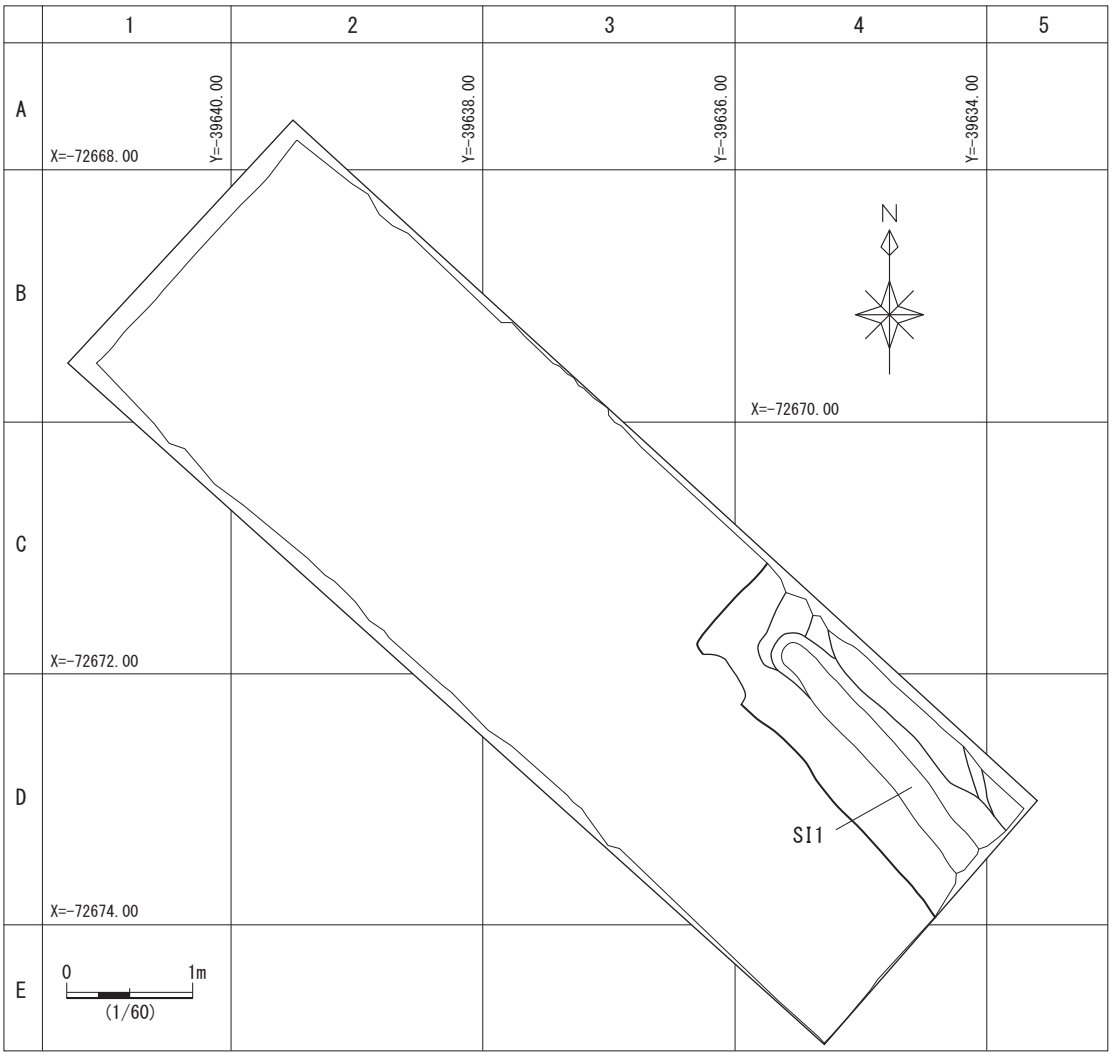
番号	平面形状	断面形状	計測値（cm）			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP6	不整円形	U字形	31.0	30.0	47.5	土師器甕１片 1.5g、礫１点 0.5g

番号は第69・83・87・88図中のピット番号に対応する

第３節　中世

第１項　竪穴址

検出した遺構は竪穴址１基であり、調査区南東角に位置する。覆土は暗褐色土を呈し、周辺の古代文化層に類似するものの、中世遺物が出土したことから当該期と判断した。遺構は第Ⅴ層上面で確認した。

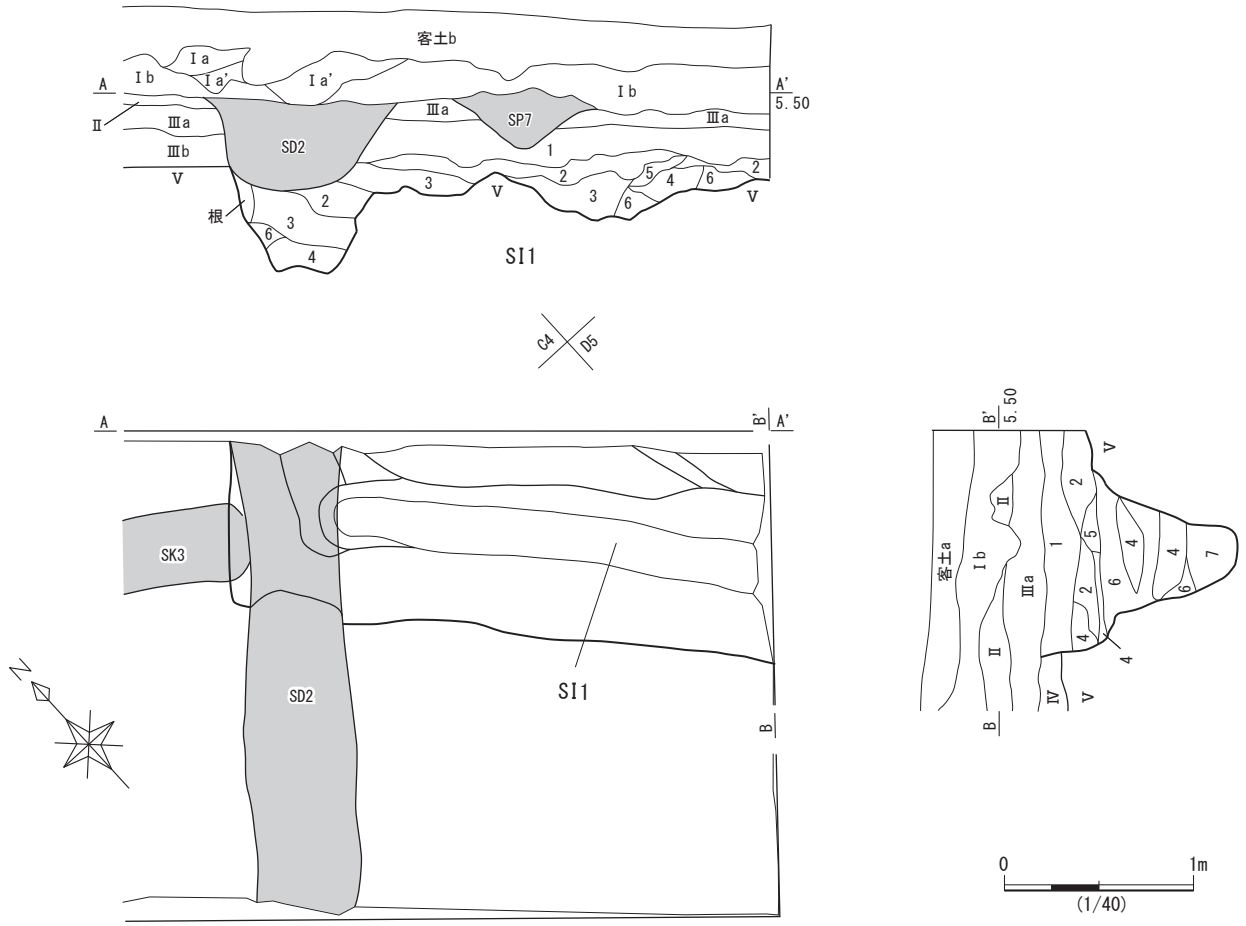


第89図　中世遺構配置図(1/60)

第１号竪穴址（第69・89～91図　図版12－１～３）

第１号竪穴址は、Ｃ・Ｄ３～５グリッドに位置する。北東側と南東側が調査区外にあたる。全容は明らかでないが、平面形状は方形を呈するものと推測される。第２号溝および第３号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が最も古い。北西辺は第２号溝の掘り込みにより上半部が消失し、下半部のみが残存していた。座標軸と南西辺の偏差は、概ねN-41.5°-W西偏を指す。残存規模は、南西辺2.88m、北西辺0.85～1.07m、中央部の深さ16.0～38.6cmを測る。中央部の底面は南西側へ7.8～8.8cm下降傾斜する。

遺構の外縁部は中央部に比べて一段深い溝状を呈し、平面形状はＬ字状に屈折することが確認された。外縁部は調査区東壁から調査区に沿って南東－北西方向に延びた後、北東側へ概ね90°屈折する。その残存規模は、南辺が長さ2.88m、幅0.70～0.86m、深さ74.2～79.0cmを測り、西辺が長さ0.85m、幅0.70m、深さ61.3cmを測る。南辺は西辺に比べ約15.3cm深い。底面は概ね平坦であり、断面形状は逆台形を呈する。



第１号竪穴址

第１層：暗褐色土(10YR3/3)　しまり強い。粘性あり。橙色スコリア径1.0mmを少量含む。
第２層：暗褐色土(10YR3/3)　しまりやや強い。粘性あり。橙色スコリア径1.0mm、褐色土ブロックを少量含む。
第３層：暗褐色土(10YR3/3)　しまりやや強い。粘性あり。橙色スコリア径1.0mm、褐色土ブロックを含む。
第４層：暗褐色土(10YR3/3)　しまり強い。粘性あり。第１～４層中で最も褐色土多い。
第５層：褐色土(10YR4/4)　しまり強い。粘性あり。暗褐色土ブロックを含む。
第６層：褐色土(10YR4/4)　しまりやや強い。粘性あり。暗褐色土ブロックを少量含む。
第７層：にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまりあり。粘性あり。灰色粘土、鉄分を多く含む。

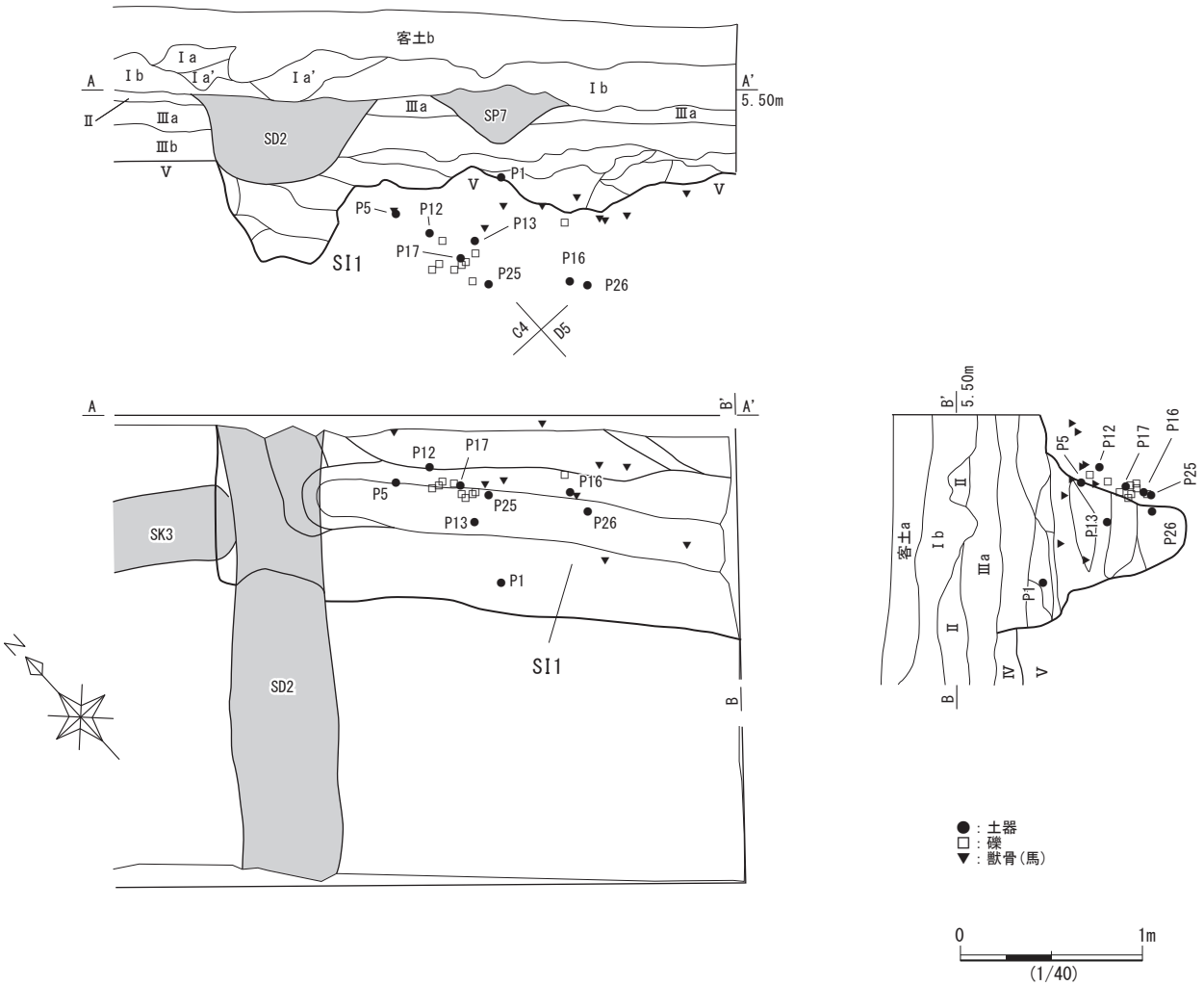
第90図　第１号竪穴址(1/40)

また西辺を掘削した後に、南辺を掘削したことが窺われる。外縁部を溝状に掘り込む遺構としては、溝持ちの掘立柱建物の溝部分である可能性がある。但し、溝部分には柱穴や柱痕の存在を示唆する掘り込みを確認するには至らなかった。

覆土は褐色土と暗褐色土の互層となっており、人為的に埋め戻された様相を呈する。

遺物は、相模型土師器坏20片38.2g、甕39片92.0g、須恵器坏１片4.6g、甕２片5.7g、陶器こね鉢２片147.1g、礫17点1,317.2g、骨片17点10.7gが出土した。骨片(馬)や礫が目立って出土した。P1・P5・P13・P16・P25は土師器甕である。P26は須恵器坏であり、底部外面に回転糸切りを施す。陶器のこね鉢は常滑または渥美窯系の遺物であり(P12・P17)、このうちP17は、12～13世紀代の遺物である可能性がある。いずれも細片のため図示には至らなかった。

遺構の時期は、出土遺物から中世と推測される。



第91図　第１号竪穴址遺物分布(1/40)

第４節　古代～中世

第１項　ピット

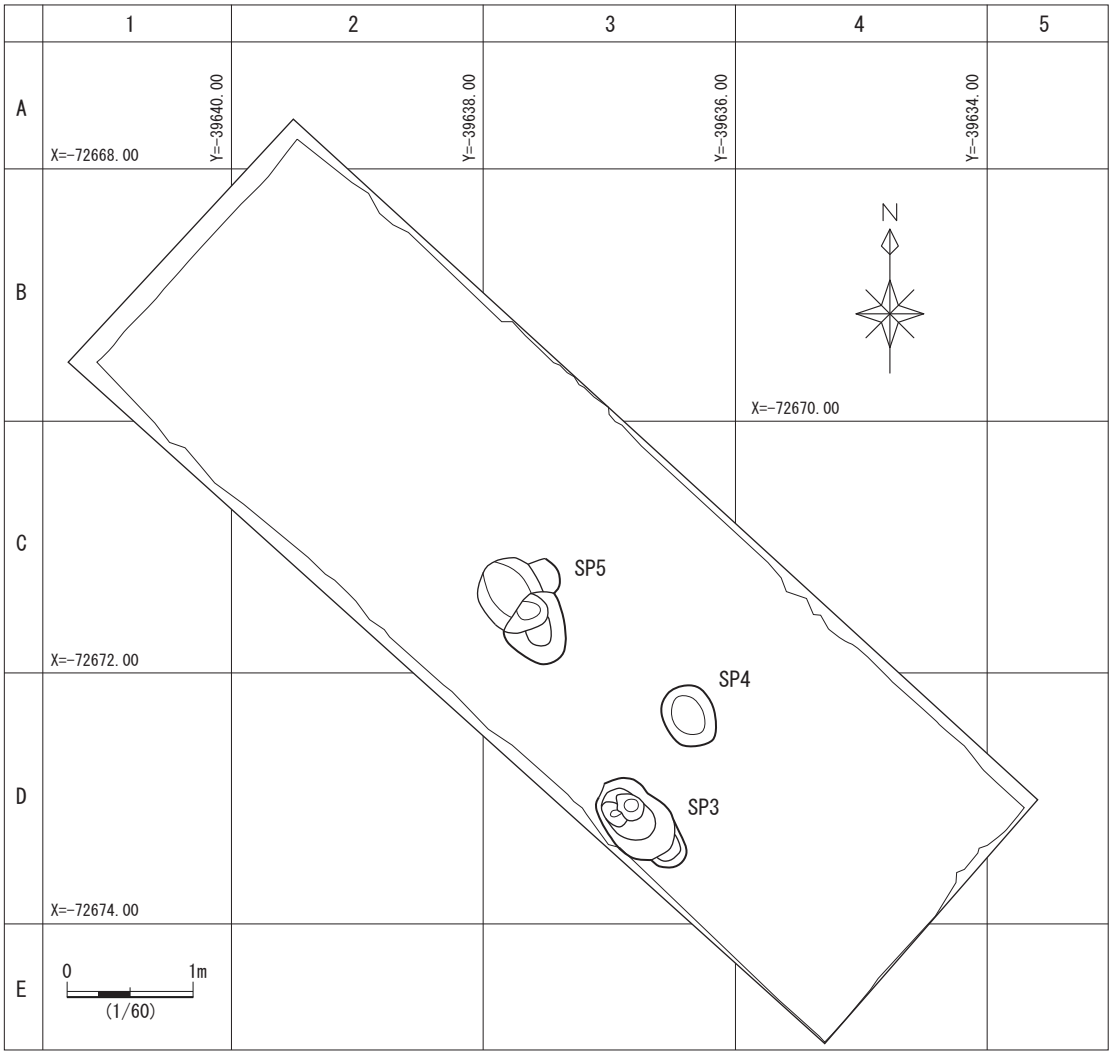
検出した遺構はピット３穴であり、調査区中央から東部に分布する。各ピットの時期の判断は覆土の特徴を拠り所とせざるを得ず、覆土が周辺の古代文化層に類似することを考慮し、幅を持たせて古代～中世とした。遺構はいずれも第Ⅴ層上面で確認した。

第３号ピット（第69・92・93図　表46　図版11－７、図版12－４）

第３号ピットは、Ｄ３グリッドに位置する。第２号溝および第４号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が最も古い。残存規模は、表46のとおりである。

第４号ピット（第69・92・93図　表46　図版12－４）

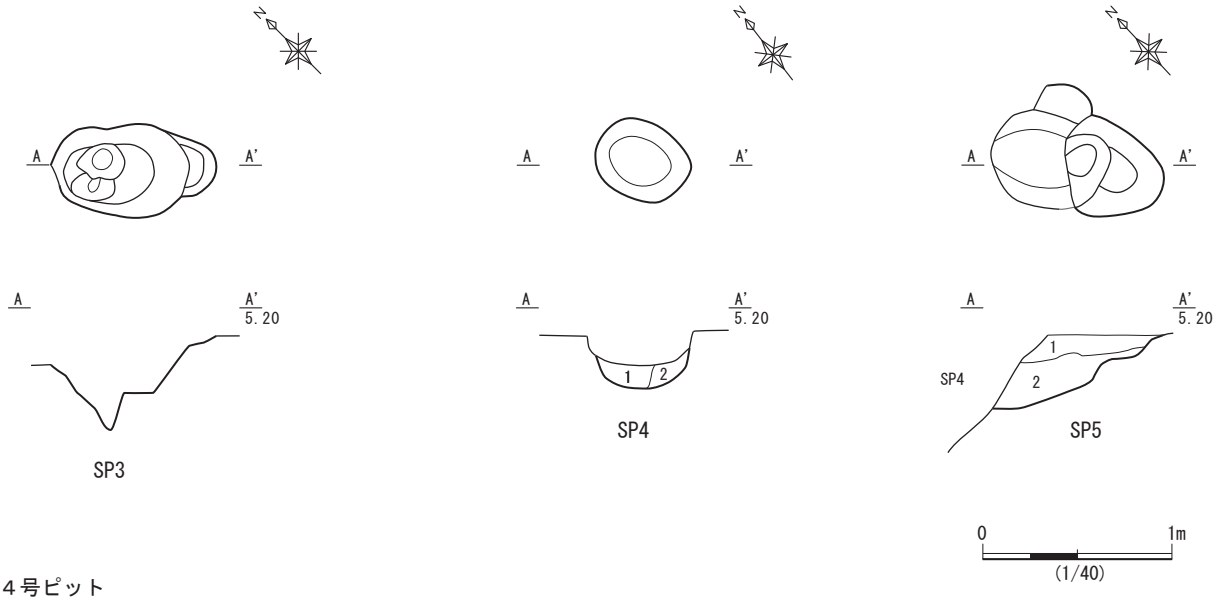
第４号ピットは、Ｄ３グリッドに位置する。第２号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古い。残存規模は、表46のとおりである。



第92図　古代～中世遺構配置図(1/60)

第５号ピット（第69・92・93図　表46　図版12－５）

第５号ピットは、Ｃ２・３グリッドに位置する。第４号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古い。残存規模は、表46のとおりである。



第４号ピット
第１層：褐色土(10YR4/4)　　しまりあり。粘性あり。
第２層：褐色土(10YR4/4)　　しまり強い。粘性あり。

第５号ピット
第１層：暗褐色土(10YR3/3)　しまり強い。粘性あり。橙色スコリア径2.0㎜を含む。
第２層：暗褐色土(10YR3/3)　しまり強い。粘性あり。褐色土ブロックが混じる。

第93図　第３号～５号ピット(1/40)

表46　古代～中世ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値（cm）			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP3	不整楕円形	U字形	87.0	50.0	40.0	―
SP4	楕円形	U字形	50.0	40.0	18.1	―
SP5	不整楕円形	U字形	93.0	65.0	42.3	―

番号は第69・92・93図中のピット番号に対応する

第５節　遺構外

第１項　表土出土遺物

遺物は、相模型土師器坏３片7.8g、甕14片35.1g、須恵器坏２片34.5g、甕２片39.7g、かわらけ１片3.1g、陶器２片22.3g、磁器１片10.3g、礫３点502.7gが出土した。いずれも細片のため図示には至らなかった。

第Ⅲ章　まとめ

本調査では、古墳時代前期から近世後半頃の遺構や遺物を確認することができた。ここでは時代ごとに発見された遺構や遺物について所見を述べることでまとめとしたい。

近世以降

近世以降については溝を主たる遺構として検出している。第１a号溝は第１b号溝と重複しており、宝永火山灰が純堆積していた。第１b号溝の埋没後継続して溝が掘られ、宝永山の噴火によって埋没したと考えられる。中世以降において南西－北東方向の溝が継続的に配され、第１a号溝と第１b号溝の重複は、区画の踏襲が窺える。

第２・３号溝は宝永火山灰が混じっているのみであり、1707年以降に埋没したと考えられる。いずれの溝も延長方向は、中世～近世の溝および第94図に記載された付近地の地割りとほぼ同じである。

第４号溝の覆土上層から第１号集石、重複して第１号土壙墓がつくられており、第１号土壙墓からは人骨が発見された。土層堆積状況と礫の出土状況を観察する限り、第１号土壙墓は第４号溝が完全に埋没する前の、いわば凹地となっている状態で掘り込まれたと考えられ、検出面が標高約5.20mとなる第１号集石とほぼ同じ高さとなる。第１号土壙墓および第１号集石の上部に堆積した第４号溝の覆土は同質であり、第１号土壙墓の時期を示す遺物の出土はないものの、第１号土壙墓と第１号集石が同時期の遺構と考えて差支えないだろう。なお第１号集石の性格については不詳であり、今後基礎資料の蓄積を待って再検討を行う必要がある。

本調査地点の北側約70.00mにあたる第13次調査地点では、「おそらく西方に顔を向け、膝を曲げて横たわる側臥屈葬」と思われる埋葬人骨が発見され、16世紀代のかわらけが出土している(長澤2007)。報告によれば土壙墓の平面形や深さは確認できなかったとのことだが、幅約2.00m以上の溝に近接して発見されており、本調査第１号土壙墓の類例と考えられる。

中世～近世

中世～近世は最も遺構数が多い。第１b号溝および第４号溝は同方向に延び、中程度以上の規模を有している。第１b号溝については、さらに事業地北西側に広がっていることや事業地の北西境が水路敷であることを考慮すれば、第１b号溝は水路敷を中心として推定幅5.00m以上になる可能性がある。また第１b号溝と水路敷は、下ヶ町遺跡第３次調査地点および第８次調査地点で発見された大規模溝の南西延長に位置し、周辺の主たる土地区画や排水路として機能していた可能性が高い(第94図)。

第４号溝は第１b溝に並行する溝で少なくとも一度の掘り直しが行われたと考えられるが、覆土に宝永火山灰を含まない点で、近世前半までには埋没し、第１b溝との共存はなかったと判断される。

中世

中世の遺構は第１号竪穴址である。遺物量は多くないが、かわらけが出土していることから中世に位置づけられる。大部分が調査区外となるため定かではないが、底面の深さが異なることから溝持ちの掘立柱建物などの他の遺構となる可能性もある。

13世紀代のかわらけや常滑産片口鉢、同安窯系青磁などが出土した。これらの遺物は、後世の中近世遺構に混入したものと考えられる。13世紀中頃は鎌倉幕府の御家人二階堂氏による懐島郷の所領時期にあたるが、これらの遺物は同時期の人的活動の痕跡をとどめるものである。また隣接地に遺構の存在を予想させる。

古代

古代の遺構は確認されず、また古代～中世とした遺構はピット３穴と遺構数が少ないが、古代の遺物が一定量出土していることから古代に位置付けられる集落域の一部であったと考えられる。遺構や遺物が少ない要因として、古代の活動があったものの中世以降に削平された可能性がある。

周辺調査においては、第17次調査地点に古墳時代中期の居住域が形成されて以降（渡辺2019）、古墳時代後期には第１・４・８・10・11次調査地点において竪穴住居址が検出され、集落が本遺跡西部に展開することが明らかになりつつある。本調査地点の南東側約35.00ｍにあたる第15次調査地点では古代の竪穴建物跡が、また西南西側約130.00ｍにあたる第４次調査地点では古墳時代後期から奈良・平安時代までの集落跡が発見されている（宮下1997）。第８次調査で検出された竪穴住居址の時期は、概ね７世紀中葉～後半３軒を含む、８世紀後半～９世紀前葉７軒、９世紀中葉～後半２軒の年代観が与えられている（宮下2003）。

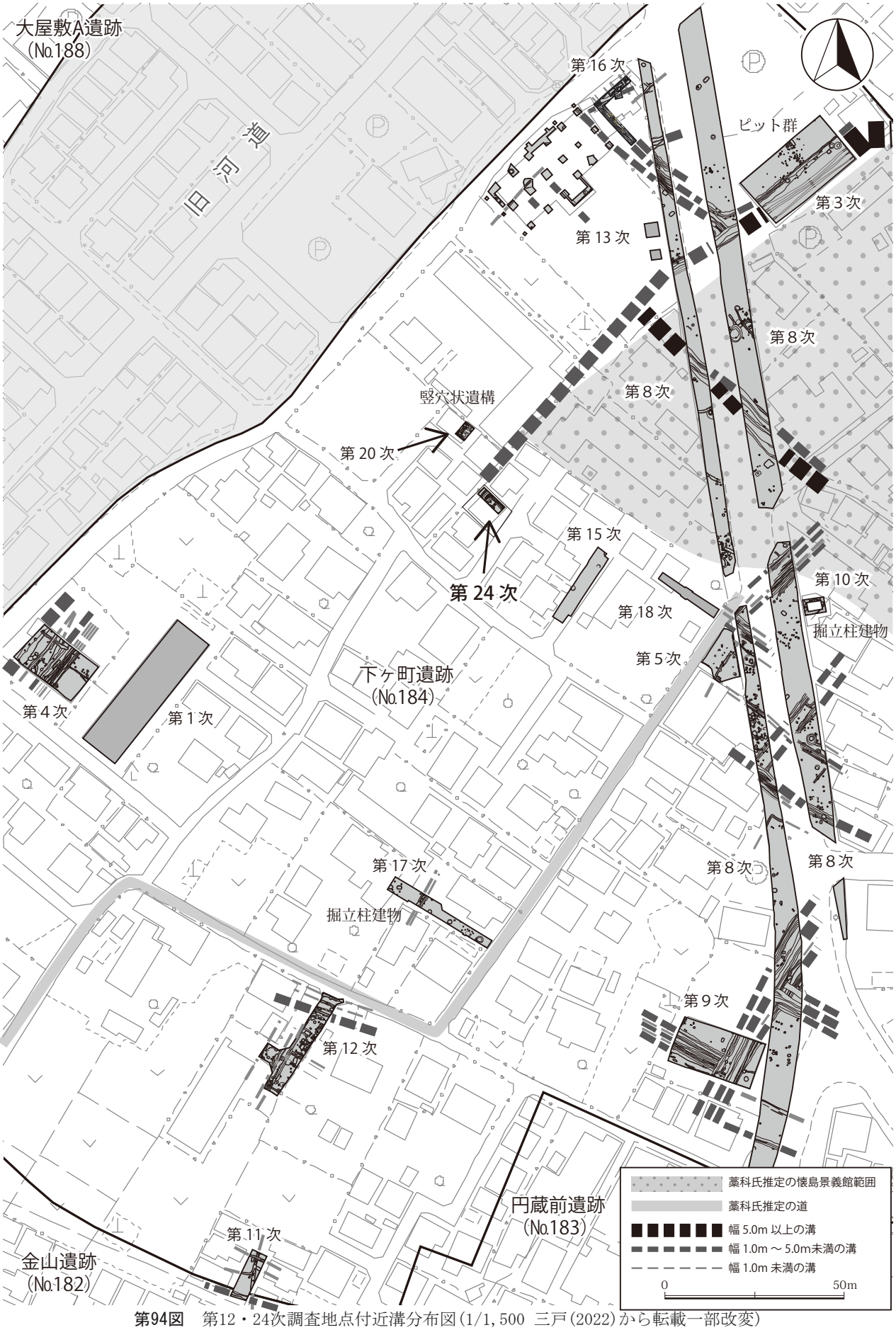
第４号溝から須恵器坏の底部が出土した。坏の底部外面には回転糸切り痕が無調整で残り、坏の時期は、９世紀代以降と推測される。本調査地点は第８次調査地点の西側約60.00ｍに位置するが、９世紀代以降の遺物が出土したことにより、第８次調査地点に展開する集落域は、本調査地点が立地する南部砂質微高地の西端部にまで広がる可能性がある。

古墳時代前期

古墳時代前期については、第４号溝から小型壺の口縁～頸部片が出土した。また本調査地点の隣接地では、第13次調査地点（長澤2007）や15次調査地点から遺物が出土しており、本調査地点を含む付近地は当該期の遺物散布地であることが窺われる。

第１・４次調査地点から旧河道を挟んだ北西側の大屋敷Ａ遺跡第５次調査地点では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物跡が発見されている（高杉・柳川2010）。大屋敷Ａ遺跡や大屋敷Ｂ遺跡の過去の調査から、北部砂質微高地側が当該期集落の一つの中心にあたることが既に明らかであるが、旧河道左岸沿いに分布する宮ノ腰遺跡、本社Ｂ遺跡、金山遺跡においても遺跡が確認されている。旧河道の地形を利用した人的活動は、水田耕作や漁労、また水運や移動手段が想定され、その結果これらの遺跡が形成されたと考えられる。さらに本遺跡にも遺跡の展開が予想される。

以上、本調査地点が古墳時代前期から近世後半の複合遺跡であることを再確認することができた。狭小な発掘調査であっても、本遺跡の基礎資料を蓄積できたことは一つの成果といえる。今後はこれらの基礎資料を通じて周辺遺跡との関係を比較検討し、市域砂質微高地の遺跡形成を復元していきたい。



第94図　第12・24次調査地点付近溝分布図(1/1,500　三戸(2022)から転載一部改変)

引用・参考文献

１．三戸智也 2022「第Ⅲ編 円蔵 下ヶ町遺跡第20次調査 第Ⅵ章 まとめ」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報Ⅸ』
茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告62　茅ヶ崎市教育委員会
２．高杉博章・柳川清彦 2010『茅ヶ崎市西久保大屋敷Ａ遺跡第５次発掘調査報告書』
株式会社アーク・フィールドワークシステム
３．長澤保崇 2007『下ヶ町遺跡（No.184）発掘調査報告書』 株式会社斉藤建設
４．宮下秀之 1997「４．円蔵・下ヶ町Ｂ遺跡第４次調査」『第８回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
５．宮下秀之 2003『円蔵・下ヶ町遺跡　－県道45号線道路改良工事に伴う第８次発掘調査報告書－』
茅ヶ崎市文化振興財団調査報告７　財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
６．渡辺務 2019「第２～６章」『円蔵 下ヶ町遺跡第17次発掘調査報告書』 株式会社アーク・フィールドワークシステム